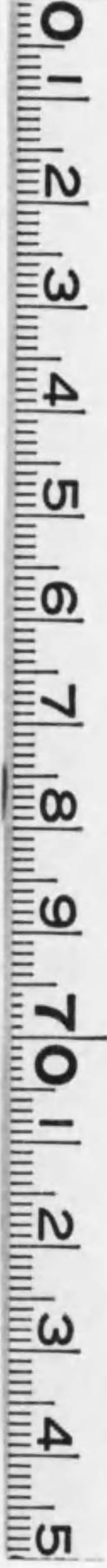


049  
0.175

049-0175ウ  
1200500724446



始





草雜入る喰

自然科學

藝術

049  
0.17

著 磨 一 田 織



版 堂 々 駿





## 喰へる雑草 序

織田氏のこの文集に、自分が序を書くのはいささか分に過ぎるやうな気がしないではないが、亦、よろこばしい好因縁である。

氏は自分の道の先輩だからである。氏の文や畫を見て心を慰めはじめたのは、自分のまだ中學高年級の頃であつたとおぼえてゐる。當時少年の心にその清新な趣と淡々として滋味多く高雅な味とを喜んで、爾來自分は氏の文や畫に對して親しみとな



つかしみを抱きつづけて來た。しかし名利に恬淡な氏は近來漸く市井に遠ざかつて、畫室と山澤とに悠々自適してゐるらしかつた。自分はまた氏の態度を好もしとして拙詩の選集「遲日抄」の刊行に當つては氏の裝釘と裝畫とを請ひ煩はしたものであつた。實は世の好尚におくれて一家の樂しみをのみ事とする自分の詩業が織田氏の手には裝はれるのに何か似つかはしいものを感じたからであつた。自分は二十數年前、一度街頭の行きずりに氏を見かけた事があつて、この事を教へた友人に紹介を求めたがその時はその機もなく過ぎたのに、遲日抄の時にははか

らずも氏の狂駕によつてはじめて面晤の機を得た。この文集に序を徵せられる因縁はこの時に熟したものらしい。

高雅な氏の爲人と約束されるところのない生き方とは、この文集を繙けば自ら明亮だからこゝに呶々を須るまい。これを喜ぶと喜ばないにかかはらず、讀者はここに今日のものでない多くのものを見出し學ぶに違ひない。古人の如きは言はないまでも、昨日の花束のやうに色はややうつろひ落ちついて匂の高なもの、これが實にこの書から掬し得るわれわれの喜びなのである。頃者、試みに敢て氏の年齢を聞いて氏の自分より十歳の



兄であることを知つた。氏は實にゆつたりとして潑刺たる明治の時代をその心身に抱藏した人である。その文集とその身邊をとりめぐる味も亦、外ならぬ明治の雰圍氣なのである。

命によつて氏の文集のはじめに不文を贈る因縁と平素抱懷しながら更めて言ひ出すまでもなかつた兄事の情とを併し記して序に代へる。取捨は専ら氏に任せよう。

昭和十八年三月中ごろ

佐藤 春夫 記す

## 自序

自分の生活を假りに二大別すると、自然科学と藝術とに分けられる。いまその全部をさらけ出して、陳列するとなると、可成の広い面積を必要とする。だから自身でも、自分のものでありながら、今日に到る迄長年の間、いまだかつて全部を展覧した試しが無い。

自然科学と藝術とに二大別したゞけでは面白くないから、更に細別しなくてはならぬと思ふが、それをやるには、大變なのだ。強いてそれを決行して、澤山の項目に分類したところで、果して判然とした區別がつくかどうかともわかり兼ねる。自分でも何があるものやら、或は無いのやら、全貌をみたことがないのだから皆目知らない。勿論その内には他人様から借用してゐるものが澤山あつて、どれが自分のものか、他人のものか何れも古色蒼然としてゐて、その境界さへも判明してゐない。



時折り、其一部を取り出して、自分も眺めるし、雑誌や何かで發表して、人様にも御覽を願ふことも忘れないが、平素は全部を襤褸洋服に包んで、人間の姿に化け織田一磨と名乗つて山へ登り、昆蟲を追ひ廻したり、植物の採集もやる。時折りは畫家らしく温泉につかつてみたり、溪流へ尻餅を搦たりする。登山家の真似ではないが、危く遭難しかけた事もある。

映畫も好きでカリガリ博士の昔時から、近頃でもまれには見物する。文學は國文でも俗文でも、芝居は歌舞伎は御座れ、文樂は御座れ、築地でも、音樂は和洋を問はずレコードも好き、美術はこれまた、東西何んでも観たいといふ始末に悪い欲深者。喰へるものは殊に好き、甘味に集まる蟻も顔まけの甘黨。法隆寺も観たいし古本屋廻りは冬の仕事と、夏冬などの幕なし生活。自然科学と藝術に關するものは、逃がさず知りたいといふ事になる。尤も自然科学の方面は全部とはいへないが、自分ながら判然とした境界がつかない。曖昧模糊として水平線が震んでゐる。

これでも先年大整理を思ひ切つて斷行して、範圍の縮少を謀つたのだが、實は面

積で上からすこしも縮少されてゐないらしく、むしろ日毎に増補改訂されるので、ますます深くなり高くなつて立體化する傾向がある。殊に日本の領土が擴張されるにつれて、更に尨大になるかも知れない。

一人で欲張つてゐても仕方がない氣もするが、これは他人に借したり譲つたりできる性質のものでもないし、賣り拂ふにも買手がゐない。尤もその大部分はインチキもので、價值あるものは僅少にすぎまい。その價值があると思つてゐるものが、實は甚だ怪しいもので、ことによると妖怪變化の化身かも知れず、バクテリアの類で、太陽の光りに會ふと、煙りの如く退散するのかもわからない。

斯くて残るものは肉體だけとなる。ところが肉體がまた素晴らしくイカサマモノで、肉はとつくの昔しに脱け去つて、いまあるものは骨と皮、これは相當な肉體で規格に合つてゐないから、洋服ぬいだら笑はれる。何時どこで裸體になつてもいいやうに、雜草でも喰つたらば、肉附きも良くなるかも知れないと、野山を尋ねて約十年、まだ靈藥には會へないけれども、浮世に出したものは版畫一枚、著書一冊、



果して苦心の甲斐があるものやら無いものやら、百年後でないと判然として来ないときかされては、心細くなるばかりだ。

今また世の中へ新らしく隨筆一冊を贈らうとしてゐる。題して「喰へる雜草」といふ。此書表題のやうに喰へるものか、喰へないものか、喰ふか喰はれるか、わかつたやうで、明確でない表題の本は、近く市中の書店に姿を現すと思ふが、讀書氏は遠慮無用、此本から何んで吸ひ取つて、心の食糧にしてもよし、いやなら無理にしないで可なり。暫くみたらば古本屋の店頭へ出すことだけは忘れずにて欲しい。

斯くて、春夏秋冬、古本屋から机の上に、卓上からまた古本屋にと、移し植ゑられてゐるうちには、折角の「喰へる雜草」も枯れてしまい、喰ふこともできなくなれば、それもまた面白い。何しろ雜草を喰ふといふことは、今に始まつた事でもなく、萬葉集の昔しから、摘草は風流だと、春の野原に袖たれて、不老長壽の恵みに浴した人は、さほど珍らしくもないらしい。

近世自然科学の發達は、喰ふ方法さへ見つければ、地球上のものは草はをろか何

物でも、人間に喰はせる爲に存在してゐるといふ觀方もあると教へて呉れる。草は人に喰はれるもの、人は自然を喰ふものと相場がきまれば占たものだ。天がすべてを許してくれた。斯うなつたらば大丈夫、食糧には心配はいらないから、大東亞はいふ迄もないこと、世界中を飛び廻つて、心の糧をしこたま攝つて、文化の華を咲かせることは、我等の以て欣快とするところ、よろしく努力を惜しむことなく、日夜研鑽、怠らなければ、やがて其日も近くにある。

自然科学も藝術も、人を育てる食糧だからだれでもこれを摘み採つて、喰ふことが先づ肝要だ。喰へばふとるが當然だが、消化しないではなんにもならない。雜草もその通りで、無闇に喰ふ其事よりも、身になるやうに調理して、味も良くなれば滋養もある。これに上越す代用食は、めつたに無いと思はれる。人は欲を深くすると、反つて爲に悪いこともある。美食も度をすごしては毒になる。

藝術といふものは、人生にとって必要なものである。何がそれほど必要なのか、人は美を求めて暮すものだ。美は藝術の魂だ。これがわかればありがたい。人の心



は美しい。これが即ち藝術だ。其れほどやさしい事柄も、容易に人には判らない。これは淋しいことではある。欲の皮に誤魔化されて、心の清浄を怠るものはいつまで待つてもたゞ淋しい。これでは宗教の力も藝術も、施す術が見出せない。

眞を求め美を求め、善を希つて完く成る。これ即ち人間の姿でありたい。ここに到るのは偉人であるが、望むことはだれでもできる。求めて止まぬ心の者は、これは甚だ恵まれた人々といふことができる。この境地は眼前に展けてゐる。雑草を喰ふのも、山へ登るのもやがては人間になれるかも知れないといふはかない希ひから音楽も聞けば映畫も観る。芝居も文學も、繪筆も執ることになるのではあるまいか、これは難事中の難事だと思ふのだが、また面白い生活でもある。

拙著「喰へる雑草」の刊行に當つて、日頃の私見を述べて序文に代へる。

尙、佐藤春夫氏は、御繁忙中にもかかわらず、本書のために序文を御執筆下さつた。茲に深く氏の御好情を感謝する。

昭和十八年陽春

草樂苑の書齋に於て 織田一磨

喰へる雑草序……………佐藤春夫  
自序

目次

自然科学編

喰へる雑草……………三  
 雑草料理……………一三  
 武蔵野の雑草……………二九  
 春の雑草の美……………四七  
 羊齒類の採集と鑑賞……………五七  
 趣味の採集……………六九



昆蟲採集の思出……………七七  
 蜘蛛の美……………九一

山岳生態編

上高地……………一〇五  
 三ツ峠……………一一五  
 吾妻山……………一二七  
 大河原峠……………一三九  
 箕面山……………一四五  
 奥多摩の山々……………一五五

藝術編

版畫と裝飾美術……………一六五

版畫の現代性……………一七七  
 版畫と寫眞……………一九一  
 海の浮世繪……………二一一  
 北齋の肖像畫に就て……………二二三  
 北齋美術館建設提唱……………二三七  
 都市美觀……………二四九  
 ラファエルコランの名作「踊子の脚」……………二六五  
 石版畫自惚話……………二七一  
 石版隨筆……………二八七  
 浮世繪斷片（歌麿の女繪、北齋の豆繪）……………三〇一  
 人形芝居の思ひ出……………三一一  
 畫集 都會生活……………三二三



目次

- 一、序 詩
- 二、並木風景
- 三、喫茶店
- 四、河岸の雨
- 五、舞 妓
- 六、寺院の門
- 七、屋臺店
- 八、河 船
- 九、警戒管制
- 十、雪 景
- 十一、歌劇見物

四

圖版解説

三三七

目次(終)

喰へる雑草

喰へる雑草

Why



雑草を喰ふといふことは、今更別に驚くことではない。不思議でも何んでもない。むしろ當然な話だ。人間は元來食肉動物でないのだから、草を食料にするのは、自然なのだ。

草を食料にする以上は、雑草より他には無い道理だから、今更驚くことも、悲観することもなく、人類はよろこんで草を食ふ可き筈だ。文化が進んで、知識が発達し、雑草は畑地に栽培され、野菜と化して、食用植物になつたにすぎない。

大根でも、蕪かぶらでも、米でも、初めから今の姿ではなかつたので、やはり山野に自生してゐた雑草であらうと思ふ。何時の頃から現在のやうな状態に改善されたかといふ事は、農業史の語る範圍に屬する。

現在山野に繁茂する雑草の種類は、何千種といふ多數にのぼるが、其内、毒草とか藥草とかいふものを除外して、残る無害の食用植物だけを數へても、相當な種類に達することは、想像するに難くない。此の多くの雑草の中には、人體を育て養ふ上に必要な精分を秘藏するものも、必ず有るに相違ない。或は現に栽培されてゐる



野菜よりも、はるかに豊富な養分を蔵してゐる種類もあらう、不老長壽の秘薬、活力素の如きもの、各種のヴェータミン、ホルモンの類をもつた種類もあると思ふ。

戦時に於て食糧の缺乏といふ事は、これは雑草を食ふ直接の動機ではない。食糧が缺乏したから雑草を食用にするのではなく、雑草はもと人類の食物であつたのだから、一度びこれを還元して、我々の食糧を多種類にするといふところに、雑草を喰ふ目的が在る。

この雑草を食用に供することは、我國に於ては今に始まつたのではない。遠い昔の話して、「日本雑草史」でも書くならば、先づお正月に喰ふ七種の紀元でも調査しなくてはならぬ。春の七種は古くは萬病を除くといふ意味から、正月七日に粥かゆに混じて食した。草の種類は、セリ、ナヅナ、ゴギヤウ、ハコベ、ホトケノザ、スナ、スバシロ、であるらしいが、草の名稱に就てはいろいろと諸説があるらしい。詳細は略すが、とにかく、正月七日に雑草を粥に入れて喰ふ習慣は、大古の生活様式の残存を意味するもので、我々の欣快とするところである。

近くは徳川時代中期に於て、東北地方の領主は、寒冷不作を救ふ意味から、平素雑草を代用食にすることを人民に教へた。これに關しては別に稿を起して述べたいと思ふ。

最近では、我武藏野雑草會が、卒先して食用雑草の研究を提唱した。現に一部の人は毎年春季には、府下神代村、深大寺に於て、雑草を喰ふ會をやつてゐる。だがこの會の催しも、まだ遊戯に類するもので、もつと眞面目になる必要がある。もつと眞剣に研究すれば、趣味も深くなるし、實際的にもなる。その方法はいろいろあるやうに思ふ。折角の催しであるから、主催者側がもつと努力して、研究的になれば、必ず効果が擧げられる。

近頃、都下の新聞紙は、折々雑草の食用になる事を書いてゐる。これも雑草會の提唱に和した聲で、特に戦時下代用食の問題として扱つてゐる。然してこれは一向に役に立つまい。何故ならば、草の名前だけ書き出しても、一般の人には植物の知識が無いのだから、どんな草か判然としない。これでは紹介しても役に立たぬ。實



地に指導して採集調理して呉れないといけない。

雑草には様々な草や木がある。これを覚えることは容易でない。同じやうな葉と形態をもつものが澤山ある。其内でも、毒草と混同し易いものは、最も恐ろしい。例へばセリの如きものだ。ドクゼリと間違へたらば大變だ。菌の類も困難だ。この分け方は、實地に就て教へられぬと、覺えられるものではない。圖面がいくら精巧でも、素人には何んにもならぬ。

雑草を喰ふことを、全国的に宣傳普及するには、先づ指導者の養成が肝要になつて来る。料理法とか雑草の栽培とか、分類鑑定とか、専門的の知識を必要とするのだから、農學校とか、農事試験場といふものが、先づ卒先して、雑草食の指導員養成に盡力す可きだと思ふ。

我々が野菜と一緒に雑草をとれば、或は體質も今よりは向上するかも知れない。病氣も尠なくなつて、長壽を保てるかも知からない。彼の七種の傳説なんども、眞實となる時が来るかも知られない。時は今だ。我々は食糧の一部を雑草にもとめて

も、決して悪いとは思へない。全國山野に自生する雑草を、片ツ端から喰へば、遠くから運搬しないでも、自然と配給されてゐる。

摘草といふ行事は、春の楽しい風流な行事の内、我々もその經驗と思出はもつてゐる。つまり摘草をもつと擴大徹底すればいゝのだ。春の摘草は遊樂であるが、もつとこれを生活活動化すればいゝと思ふ。

「春くれば 雪消の澤に袖たれて まだうら若き若菜をぞ摘む」

といふ大宮人の風流ではなく、實生活に即したものでなくてはいけない。だが、雑草を摘む態度は、どこ迄も堂々として、立派さを保つてゐなくては駄目だ。乞食犬のやうな賤しい慘めな有様で、雑草を摘むならば、最初から八百屋に行列した方が似合つてゐる。大宮人が若菜を摘む心もちは、我々もそのまゝ受繼ぐ可き態度だと思ふ。大國民の誇りは失つてはいけない。「武士は喰はねど立揚子」といふ諺は、負け惜みといふ意味ではない。立派な教養ある身分の者は、たとへ喰はないでも、誇りをすてぬといふことだ。八百屋に心にもない世詞を述たり、甚だしいのは媚態



を示しても、大根の一本も餘計に買ひ込みたいといふ欲張つた賤しい根生の人々は我が雑草仲間には入れられない。

雑草を喰ふのは、どこ迄も人間的の表現でなくてはならない。犬猫が飢餓に迫つて、はき溜をあさるやうな、悲惨な姿と心をもつて、食糧を雑草に求めるならば、必ず失望するに相違ない。雑草は腹を充たすに足る食糧ではない。

雑草は、主として精神を爽快にするものだ。大和魂を育てるものだ。雑草は安心を與へるものだ。物欲に飢えた餓鬼は雑草を摘む資格が無い。

山野に繁茂する雑草は、天の與へた美祿だ。これはだれでも自由に摘取つて、心身を養ふに足る食糧だ。問題は摘む人にある。薬草もあるし毒草毒菌もある。これを勝手にでたらめに食すれば、たちまち中毒するのはいふ迄もない。撰擇するのは知識だ。大自然は偉大だ、薬草も毒草も、混同させてある。食用植物も一緒に茂つてゐる。これ等のものすべては、山野に自生してゐる。人間は飢餓に迫ると、判断が出来なくなる。こんな人達は雑草を食はないことにしないといけない。

雑草を喰ふならば、よく落着いてこれを鑑別しなければならぬ。それには、誇りを忘れてはいけない。人間が落着いて靜かに考へれば、何んでも勝手に喰へる。大自然はすべて人間の食料になる。

然し、これはたゞ考へてもいけない。どうして喰ふ可きかといふ事、それを考へなくてはならぬ。本を讀んでも直ぐは判らない。人に聞いても教へては呉れない。たゞ大自然が教導してくれる迄は、一心にそれを考へぬこと。

野路を一人歩くにも、山へ登るにも、或は一生考へてもまだ足りないかも知れない。それは人々の精神のもち方によるので、それさへ正しければ、だれでも悟ることが出来る。



雜  
草  
料  
理



アシタバの花 (2)

アシタバ

三宅島地方ではこの若芽を常食する



我が國の歴史をみるに、太古の昔しから、自然と人間とは親密になつて、ともに生活して來てゐる。だけれども、自然といふものゝ深さは果知れない。この果知れない自然を、限られた人間の生命をもつて視て來た。人は次から次にと代つた。何代も何代も交代して自然を研究して來た。その歴史が遺つたにすぎない。自然はいまだによく判らない。

例へば、我々が毎日に食糧としてゐる植物は、全部で何種類あるかといふに、僅かな數にしかなるまい。其内でも、毎日喰ふものは、季節にもよるが、五六種を多く出まいと思ふ。これを我國の植物全體の種類にくらべたならば、九牛の一毛にも足りない僅少な種類だ。尤も、野生の植物は食糧にしないで、栽培した農作物だけを専ら食糧にしてゐるといふ現在の生活様式が、食べ慣れた野菜を喰ふといふ習性となつて傳へられたのだが、これを改良して、野生の植物も合せて喰ふといふこと



にすれば、多少は増量できる筈だ。増量できるばかりでなく、自然に一步迫つて行くことにもなる。神秘の幕にかくれてゐた植物が、斷然人間の爲に共力して呉れることにもなる。斯くして人間は自然をすこしづゝ知ることが大切なことだ。

人類の爲に幸福の基礎を作ることにもなる。栽培されて農作物化された野菜類には、最早新鮮な養分は流れてゐない。園藝化された草花が、一向に新鮮潑刺としたところがなく、何となく生氣が脱けてゐるのと等しく、作られた野菜類は人工的植物で、ヴェタミンも乏しい感じが深い。それに反して山野に自生する雑草は、放たれた植物であるから、粗野な荒らいところはあつたが、如何にも新鮮で、潑刺とした生氣が充滿してゐる。これを適當に調理して喰ふことは、我々の生命に注射するやうな効果があると思ふ。昔しから、正月七日の七種粥は、病魔を拂ひ、不老長壽の藥となるといはれてゐる。今、我々が提唱する雑草食も、即ち七種と同じもので、不老長壽は勿論、その他にも澤山の效能がある。

二

享和二年、出羽米澤の大守、上杉鷹山公は、家老笹戸善政に命じて「かてもの」といふ一書を公刊せしめた。さうして領内全部の住民に頒布した。この「かてもの」は、即ち雑草を調理して凶年の時に代用食とせよと、植物の名稱、料理法を詳細に説明した一書だ。

流石明君といはれた鷹山公だけあつて、享和の昔、すでにこの著を公刊して、雑草の喰へることを教へ、豫め飢餓に處するの道を示された。

「かてもの」初版の奥附には、享和二年三月、中條、笹戸と書いてある。この初版は、一千五百七十五部を印刷して、領内住民に配布された由だが、其原版は、そのまま、上杉家に傳へられ、現在は米澤圖書館に珍藏されてゐる。昭和十五年六月、米澤市役所は、この原版を用ひて、再版を印刷し、改めて頒布した。この再版の印刷部数は知らないが、これも僅少製本したのでらしいと推察できる。



何分にも享和頃の古い木版を、活版の機械にかけて油墨で印刷したのだから、澤山は刷れまいと思はれる。用紙は粗末な紙ではあるが、袋紙で和綴の製本であるから、この邊から察しても千部位で、餘り出さなかつたのらしいと思ふ。私は「かてもの」の初版を藏してゐる。再版を米澤圖書館の好意から手に入れることができたので、これも合せて所藏してゐる。

いまこの「かてもの」の内容を詳細に紹介したいとは思ふが、それでは餘り長くもなるし、原本のためにも迷惑となると思ふから、代用食として擧げられた雜草の名稱だけを轉載するに止める。

イタドリ、イチビ、ハスの葉、ハウキ、ハハコグサ、ハビヤウ、ハシバミ、ホド、ヘビアサ、トコロ、トウゴボウ、ドロナ、ドロブ、トチの實、チンダグリ、ヲケラ、オホヅチハ、ワラビ、ワラビの粉、カラスウリ、カラスウリの根、カタクゴ、カヤノ實、カバ、カラスノヤ、カハラチャ、カハホネ、カハラシチコ、カヤナ、ガツキ、ヨシビコ、ヨモギの葉、タビラゴ、ツユクサ、ウツボグサ、ウル

キ、ウシヒル、ウシヒタイ、ノニンジン、ノ、ヒル、ワレモコウ、ノギク、タンボ、クワンゾウ、クズの葉、クズの根、ヤチフキ、ヤマゴボウ、ヤマウツギの葉、マタタビの葉、マメ、マユミの葉、フキ、ブナの葉、フジの葉、ゴンガラビ、コウズの葉、コクサギ、アカザ、アサツキ、アヅキの葉、アザミ、アメフリバナ、アサシラゲ、アイコ、サ、ギの葉、サワアザミ、サイカチの葉、サルナメシの葉、ギシギシ、ユリ、メナモミ、ミツバ、シャゼンサウ、シダミ、エゴナ、エンジュの葉、ゼンマイ、スギナ、スベリヒユウ、スイカヅラ、

以上の如き多數の植物名稱と、其料理法とを親切に記録してある。尙この他にも味噌の製法とか食糧の保管法とかいろいろ記載してある。然し何分にも、地方人士の爲に發刊された本であるから、植物の名稱も多くは米澤地方の方言で、この點がすこし我々には困難を感じさせる。

米澤圖書館が親切心を出して、再版書には方言に註釋を加へるとか、卷末に解説を添えるとか、何とか考へて、現代人に充分理解のゆく道をはかる可きだつたと思



ふ。この點がすこし物たりない。

三

徳川時代に刊行された救荒植物書は、「かてもの」の他にも澤山出版されたとは思ふが、さて、どんな書目が挙げられるのか、まだ研究が届いてゐない。たゞ、たしかに有ると考へるだけだ。

それ等に關しては、他日のことにして、事變以來、都下の新聞に現れた食用雑草の名稱をこゝに紹介してみたいと思ふ。

ノビユ、タビラゴ、スベリヒユ、オホバコ、ツルナ、ヨシ、アシ、ス、キ、カヤ、カモガヤ、ナカハグサ、マツバボタン、アカザ、ハコベ、ウハバミサウ、シオデ、カタクリ、ギバウシ、マツムシサウ、ヤマボクチ、レンゲ、ヤブカンザウ、アザミ、アヲビユ、サツマイモの葉、ナンキンの葉、オニタビラゴ、イヌビユ、タンボボ、ノゲシ、オニノゲシ、アキノノゲシ、カラスウリ、ムカゴ、アカザ、フキ、

ヒルガホ、オランダガラシ、ヨメナ、

以上は最近の新聞記事から抜き出した食用雑草の名稱だ。牧野博士、本田博士等の専門家の言はれたものだから、間違もないと思ふが、然し、「かてもの」にくらべて、別に新しい発見もあんまり無いらしい。尤も新聞の記事だから、片々たるものではあるが、これを除いては、他に雑草食の専門研究書といふものは無いのだから、やはり古くても「かてもの」が唯一の文獻といふことになる。殊に植物の種名も豊富だし、調理法も詳細に出てるのだから、これに上越す著述はまだ容易に出ないと思ふ。

それはとにかく、「かてもの」と最近新聞に出た食用雑草にもまだ發表されてゐないもので、現に試食済の草に就てすこしく紹介して置く。これは別に珍らしくもないが、未發表のものもあると思ふから、記録することにする。

〔イハタバコ〕

イハタバコは奥多摩でも、逗子鎌倉でも、林間の岩壁に、着生してゐるもので、



イハタバコ、ケイハタバコと分けられてゐる。どちらでも食用になる。花季はケイハタバコは六月頃、イハタバコが七八月頃に咲く。花が美しくしいので観賞用として栽培されてゐる。

料理法は、味噌汁の身、ヒタシ物、ツクダ煮等だが、その内、ツクダ煮が一番美味だ。

### 〔スミレ〕

スミレ類は何が好きといふほどは試食しないが、タチツボスミレのテンブラは一度試食した。

スミレ類の研究家、長澤光男氏の話しによれば、秋田地方では、オホバキスミレを採集して、葉をヒタシ物にして食ふ習慣があるといふ。なるほど、オホバキスミレの葉は、食用にするには良いだらうと思はれるが、何しろ東京地方には自生してゐない。東京では山草家が、大切に栽培してゐる位のもので、とても珍重されてゐる。上越の谷川岳、信州徳本峠、には自生してゐて六月頃は見事な黄色い花が咲い

てゐる。

### 〔イラクサ〕

先年、上高地徳澤のホテルで、初めてイラクサを喰はされた。察するに、ホソバイラクサだらうと思ふが、何となく珍物といふだけで、決して食欲が出るほどでもない。ホソバイラクサは有名な高山蝶コヒオドシの食草だから、これを人間がくへばコヒオドシのやうになるかも知れない。

### 〔ヤマウド〕

山の美味、ヤマウドの新芽は、生食するに限る。こんな新鮮な香氣に充ちたものは、農作物には無い。畑地に作るウドはモヤシの芽だが、山に自生してゐるヤマウドは、モヤシの芽でない。

### 〔ホーソ〕

海岸に自生してゐる草で、以前刺身のツマによく見受けた。紅色のくきに、黄色い緑の葉、見たゞけで喰いたくなる。これをシタシ物にすれば、やはり贅澤な食料



だ。ミツバよりも更に良い。生でサラダ油でも掛けると申分が無い。

〔テンモンドウ〕

藤澤地方の海岸の林間には、テンモンドウが自生してゐる。テンモンドウは百合科の植物で、温室に栽培するアスパラガスによく似てゐる。この根は球根だから、これを探集して砂糖漬とする。これは薬用になる。以前は菓子屋の店頭で、テンモンドウの砂糖漬を賣つてゐたものだ。

〔ドンダリ〕

ドンダリの實は、秋になると野原に澤山落ちてゐる。これを焼いて食用にする。あんまり美味とはいへないが、決していやなものではない。栗のやうに甘くはないし、シイの實のやうに香りもないが、代用食には充分になる。これは料理法を研究する價值があると思ふ。

其他、アケビ、ケンボナシ、ヅミ、キイチゴ等數へると相當なものだが、あまり

長くなるから略すことにする。

四

雑草料理は、まだ未開地だ。これから研究すればいくらでも領地は擴大すると思ふ。然し、代用食とか、趣味とかいふのでは、一向に面白くない。雑草を研究して人間の食糧を改良する位の眞剣さと、熱心がなくてはいけない。それには、材料の豊富な草を研究す可きだ。オホバキスミレがいくら美味でも、東京人には何んにもならぬ。東京地方ならば、春はカンゾウの芽、イタドリ、ヨメナ、ツクシ等、材料の多く獲られるもの、手軽に調理できるもの、秋はドンダリ、オランダガラシ夏は山地へ散歩したらば、イハタバコ、ワラビ、其他山は樹木の芽がいろいろある。果物としては、キイチゴの黄色や眞紅の粒は何ともいへず愛らしい。

雑草を喰ふ仕事は、これから本當に研究されなくてはならない。一歩進んで雑草の栽培、農業化も試みたいものだ。元來野生の雑草だから、畑地へ栽培するのも樂



だと思ふ。多くは宿根草だから、一度種子を蒔けば毎年收穫があるといふことにもなる。花は切花とし、芽は食用にして、毎年あんまり骨折らずに出来たらば、これが一番に有利な仕事だ。カンゾウ、キスゲ、ギバウシ、アザミ、ヤマボクチ、ユリ、カタクリ、花の美しいのや、葉の美味なのや、根もまた食用にできるの等、最も面白いものだ。

春の草は、春だけ摘んで、夏や秋にはだれも振り向かないが、これも農作物のやうに、いろ／＼手を盡したらば、四季收穫があるかも知れない。材料は野山に群れてゐる。今は雑草の研究としてはチャンスだ。この好機を逃すと、また何時來るかわからない。

雑草料理は、東京大阪のやうな大都市には向かない。けれども、都會の人でも、山野に遊んで、摘草をするといふ行事は、我國の古い風俗でもあるし、優美な生活として、これを盛んにする方がいゝと思ふ。日光浴をしながら、紫外光線に恵まれた一日の摘草は、都會生活の疲れを慰さめる。同時に摘んだ草は、料理して食卓を

賑やかにするとなれば、だれでも、よろこんで賛成するにちがひない。

摘んだ草が、不老長壽の靈藥で、老人も若者となれるのだから、國策上政府から獎勵でもしてくれると、一躍して全國的の運動化が可能となる。殊に地方は、手近い所に山野が待つてゐるのだから、號令の下ると直ぐに摘草に着手できる。或は分業にして、摘む人と喰ふ人は別でも良いが、これは配給といふ形式になるから、雑草食はどこ迄も、自分で山野へ出て、日光浴をしながら、大自然と親しむといふ點を、尊重した方が善い。摘草は、詩情豊かな日本の年中行事だから、この格を落とすてはいけない。

「君が爲め春の野に出て若菜つむ 我衣手に雪はふりつゝ」

百人一首にある歌のやうに、風流の情感を忘れてはいけない。雑草だからいくらでも取り放第だといふ欲張りは、嚴戒しなければならぬ。野山が坊主にハゲるばかりで、永遠性もなくなる。地方の山岳が植物の採集を禁じてゐるのも、亂獲するからだ。いくら山野自生の雑草でも、都市何萬の人口が、一勢に採集すれば、立所に



ハゲ坊主に變る。

雜草類は宿根多年生が多いし、種子からの繁殖率も素晴らしいから、これを枯死させたり絶やさないとやうに注意して、必要量だけを折々採集すれば、永久に資源を確保することが出来る。もし買溜根情を出して、一氣に根絶やしをやれば、イソツプのお伽話にある金の玉子を産む鶏の話と同じことになる。欲深者は、雜草仲間にはどうしても入れられない。無風流、殺風景、藝術を解さない人達も、大自然を恐れない者も、やはり雜草組には入れたくない。

市井に生活してゐても、魂は明朗な、清淨な世界を求めてやまぬ人々が、人間らしく生活する爲に雜草を喰ふのでなくてはならぬ。人間の食料としての雜草、こゝに深い意義が在る。斯くの如き人々が、不老長壽の藥草に救はれて、元氣に活躍すれば、日本の文化のために萬歳を唱へなければならぬ。曠野に充滿する雜草が、御國の爲に盡すことができれば、これ位良策はない。雜草料理は一日も速かに研究されなければならぬ。

## 武藏野の雜草



草花にたいする趣味が、度々變遷して、華美なグラジオラス、チュウリップ等の西洋草花にもあきが來て、もつと粗野な、原始的で人工を加へてない草花が欲しいといふ、希望が芽生へたのは、可成以前のことで、爾來、野山に自生してゐる草木の類が、一番良いだらうといふことに落着いて、雑草を採集して來て、庭に移植してその繁殖開花を眺めてゐた。其後續いて毎年やつてゐたが、郊外に居住するやうになつてから、更に其熱はたかくなつて、園藝化された植物を好まない氣もちが、年毎に甚だしくなつた。これは趣味の向上ではなく、洋食にあきて、お茶漬を好むといふ位の變化だつたが、最近には、お茶漬が進展して、雑草に對する意識が、強固になつて、科學的の基礎のもとに、雑草を知りたいといふ欲望が出て來た。

雑草の分類、雑草の分布、雑草の生態、といふやうな、植物學的方面から、雑草の培養、雑草の繁殖といふ園藝知識まで得たい氣もちが旺盛になつたのは、争へな



い事實であつた。ところが偶然にも、同じ雑草仲間もあるもので、計らずもそれ等同志が集まつて、「武藏野雑草會」といふ會を設立したのは、まだ極最近のことで日も浅く従つて何事もやる間がない。

併し雑草會の目的といふものは、可成立派な項目からなりたつてゐるのだから、それが實現できたらば、相當に面白い仕事が世間に發表できると樂みにしてゐる。趣味の雑草といふ範圍もないではないが、單にそれ切りの、道樂仕事で終らせたくないで、此點同人の努力も一通りではない。假りに其二三を擧げてみると、

- 一、雑草標本の製作
- 一、雑草の分布
- 一、雑草の培養に關する研究
- 一、藥草の研究
- 一、古美術に現れた雑草の研究
- 一、雑草料理の研究

一、雑草に關係ある古刊本の蒐集

一、植物圖書の蒐集

一、特に、武藏野の雑草に關する文獻蒐集

これ等の仕事は、會員全般が共同でやる筈であるが、主任を一人と定めて、分擔してやるといふ形式をとつてゐる。その方が徹底してやれるだらうと考へる。

會名に「武藏野」といふ地名を冠してあるので、武藏野の雑草といふやうに解する人もあるが、これは地名を冠したといふ迄の軽い意味で、實は「日本雑草會」といつても、差支ないばかりか、更に適切かも知れない。尤も、會の所在地が武藏野だし、會員が武藏野の住民だから、武藏野の草を蒐集研究することは、勿論だが、これはどこ迄も特殊研究の項目に擧げるだけで、これを全部の仕事とするのではない。むしろ日本全國の雑草を對象とすることによつて、我々の仕事は活氣が出て來るし、存在の意義もあるといふわけになる。



## 二

もとより趣味の會合で餘技的であるから、雜草の特殊の味、形態色彩等を鑑賞するといふことにも、重要な意味がふくまれてゐるが、其他にも前述の如くに、植物學的研究、園藝的の技法、藝術的の考察、産業的の試験等もやれる限りは會員の手でやつてみたいのである。例へば、染料としての雜草といふことなども、相當な價值があるものと信じる。

將來雜草會の手で、人類文化のために萬一お役に立つ仕事ができたと假定するとそれこそ會の光榮であるが、たとへ、其處まで達し得なくても、花の色香を愛するだけの感傷的會合で終らしたくないと思つてゐる。何しろ現在では、會員の數も十何名の小數であるし、仕事も序の口で、まだ語るに足る何ものも出來てゐない。毎月一回の野外採集會と、一回の雜談會だけを缺かさず實行してゐるに過ぎない。其内には會員も増加するだらうし、従つて仕事にも活氣を帯びて來ると思つてゐる。

染料のことで、武藏野特産の紫草のごときも、有名な江戸紫染の原料だが、古來亂獲され盡した結果、現在では武藏野からその姿を消してしまつたかと思ふ位だが、これ等も、我々の手で保護を加へ、培養したならば、もとより雜草のことだから、或は昔日の盛觀を呈さないともいへない。

こんな仕事は、元來國家的の仕事で、農事試験場あたりが適任だと思ふ。併し雜草會もまた及ばずながら、力を盡してみたいと思つてゐる。紫草でなくても、茜草の如きは、到る所に自生してゐる雜草だから、新しい茜染の法でも考案すれば、立派に工業的價值をみとめられるに相違ない。これ等は、一例に擧げたのみだが、其他にも、様々な残された仕事、山をなしてゐる。我々は甚だ繁忙なのである。併しそれだけ雜草會の前途は面白いともいへよう。

藝術的に雜草を眺めても、意匠圖案の好資料で、今後は雜草を應用した圖案が、世間の流行を吹飛ばす時代が必ず來るものと考へられる。今日最早どう思つてみても、チュウリップ、ワスレナグサの平凡低級な模様では進展する餘地が無い。この



有様を救ふものは、新鮮で豊富な雑草あるのみだ。現在は圖案界の一轉機に達してゐる。染織圖案は殊に然りだ。其他、平面圖案、立體圖案、すべて方向轉換の時代に立つてゐる。雑草の研究はこゝにも、偉大な富源をもつてゐる。

ルネッサンスのアカンサス、飛鳥時代の忍冬模様、これ等の資料はすべて雑草だつた。殊に雑草は山野一面にはつてゐるのに、これを再び活躍させる人もないのは、美術界があんまり忙しすぎるから、郊外散策の時間もない爲か、それとも、チュウリップ、ダリアに傾倒しすぎて、他を振り返る餘地を得られない爲か、惜しい氣がする。

三

我雑草會員の内には、幸ひにも、染織家もゐる、日本畫、洋畫家、圖案家もゐるから、他日、これ等の放棄されてゐる資料を生かして、新しい雑草藝術が現れないとも限らぬ。アカンサスはアザミの葉によく似てゐる。武藏野のアザミから唐草模

様が考案されないこともない。むしろアカンサスよりも面白いものが考案創作されなくてはならぬ。現代建築には雑草裝飾が特色だといふ時代が来るかも知れない。

斯くの如く雑草會員の仕事は、藝術界に延びても、可成廣い領土を占めることが不可能ではない。或は産業としてジュズゴの利用、タケニグサの利用等様々の懸題がある。更に方面を園藝的の立場に直すと、これはまた限りもなく雑草の世界は續く、雑草の鉢植、雑草の切花、雑草の種子、いくらでも新しい境地が残されてゐる。

我々は其處までもやりたい。進んでは雑草料理も公開したい。イハタバコノツクダニ、ギバウシのミソヅル、ノブドウのブドウ酒、といった調子で、多少インチキの感じだけでも、會の仕事としては、こゝ迄も研究する目的になつてゐる。其他雑草の中に放棄されてゐる仕事は、まだくゝいくらもあつて、中には國家的の有利な事業も、必ずしも無いとは斷言できない。

併し我々が、其すべてを完結し得るには、永い時間と、多くの費用と、非常な熱心と、勞力がいるから、現在の會員では、その何十分の一くらいしか、仕事が出来



ないかも知れない。内務省とが農林省とかの保護でもあれば別だが、財力の無い團體だから、此方面で進展をさまたげられるから、口ほどもなく、案外何もせずに居なければならなくなるかも知れない。だが、それでもいゝのだ。希望だけもつてゐるといふことは、無いのにまさるから、それで満足して、身分相應の仕事をやるとの話しであつて、別に失望はしない。雑草といふものは、元來が華々しいものでないのだから、地味に生きる道も知つてゐる。

雑草を採集して庭前に培養する。其内から料理して朝の食事を賑はすとか、軽い病氣に薬草を試みる等でも、結構生活を豊富にして呉れる。其他のことは餘力あつての話しになるが、切角たてた方針だから、なる可くならば、全般に渡つて、徹底させたいのは、人間の欲望として、通有のことだ。

それには多くの人が、共力一致して、仕事をやれば、必ず或點までは、實現できないことはない。雑草運動を全国的にする必要は、だれでも感じる筈と思ふ。多勢の人間が力を合せて、研究したならば、下らない雑草も、案外良い材料にならないと

はいへない。時は非常時だといふ。此際充分この方面に努力してみるのも無駄ではあるまい。

四

植物學的にみても、我武藏野の雑草は、珍奇の種類ではないらしい。普通一般、どこにでも自生してゐる雑草で、別に何んでもないが、とにかく種類は可成豊富らしい。我雑草會は、特殊項目として、武藏野の雑草の種類を調べ、其目錄を作ることになつてゐる。ついでに、分布をも調べあげて發表したいといふ希望をもつてゐる。分布状態などは、甚だ急を要する仕事で、日に月に膨脹する大都市の偉力は、可愛らしい雑草を奥へ奥へと追ひ込んで、果は武藏野には一草も無いといふことになるかも知れない。

例へば、二十年昔には、新宿角筈あたりにガラに生へてゐたオミナメシ、シヨドリバナの類が、現在では、吉祥寺まで追はれて來た。吉祥寺にも永くはゐられない



有様だから、何年か後には、奥多摩でないと、オミナメシは自生してゐないといふことになる。これ等も植物分布學上、都市と植物の關係を物語る面白い資料といへる。尤も當然な話しだといへば、それ切りで、原野が市街と化すには、先づ草木の類を一掃してからでない、都市は建設できない。従つて草木は滅亡する道理だ。不思議はない。角筈で行はれてゐた人植争闘が、現在は、吉祥寺で戦つてゐるが、やがて奥多摩まで飛んで、大都市の緑地といふ區域に達すると、こゝはまだ植物の安全地帯だから、戦闘は休止され、雑草雑木もはじめて安住地を得ることになる。

同時に、武蔵野は無残にも、一面コンクリートの海と化して、人間は熱の反射で、死の苦痛をなめさゝれる。これは何年後か知らないが、其時代になると、武蔵野雑草會で調査した雑草の目録と、其分布は、歴史的價値が出て来る。各自の庭園に移殖した雑草は、絶好の記念品となつて遺る。武蔵野が都會になつて、庭に一鉢の雑草が茂つても、甚だ面白い風景になる。

この記念といふ意味からみても、雑草運動を國全的にして、各地方でも、雑草を

保護して、愛育、研究したならば、運動は徹底して來ると思ふ。例へば富士山を中心とした「富士雑草會」、奈良を中心とした「奈良雑草會」或は「大和雑草會」其他、北アルプス、南アルプス、北海道、東北等と、各地に此種の會を起して、中央の武蔵野雑草會と連絡をとつて、働いたらば、更に面白い仕事が容易にやれると考へてゐる。

専門雑誌の刊行、圖書の出版、展覽會、講演會、もつと進んでは、研究所の一つ位は建築できると都合がいゝが、雑草圖書館を兼ねたバラック建築が出来てもいゝと考へられる。果て知れない夢を追ふのは、素人のくせかもしれないが、とかく、我々は、空想を先に馳せるから、現實にぶつかると、これが逆になつて現れて來る。それよりも、草を探つて、標本でも作つたり、料理して朝食の卓を賑はせてゐた方が、着實な一步を踏み出したといへるかも知れない。正確さは後者の方に在る。

## 五



私は、雑草、雑草と書いたが、この雑草の範圍は實に海草から、高山植物に到る農作物、園藝植物以外の、山野に自生する草本、木本を指して雑草と呼ぶので、雑草雑木といふ意味がふくまれてゐる。普通は、野外植物、高山植物、海岸植物、海草、水草等と、區別されて呼稱したものだ、これを總括して「雑草」と自稱してゐるのである。

藥草もあれば、毒草もある。其種類は何千だかしらないが、相手にとつて不足はない。會は生れたてだが、其前途は洋々としてゐる。役にも立てず放任して置いた雑草雑木が、國家の富を何分か益すことになつたらば、重大な功績だといへる。我々雑草會員は、將來こゝ迄やつてみたいと考へてゐる。山へ登つたり、野原を荒し廻つて、罪もない草木を生捕りにして歸るのみが目的ではない。これは順序であり手段だからやるので、一日も早く卒業して、次の仕事にかゝらなくてはならない。

次の仕事といふと、産業的、藝術的といふ所へ落着く筈で、とにかく、それはまだ遠い話として、目下採集と研究とに、一生懸命になつてゐる。けれども、我々

も、各自専門の學業をもつてゐるのだから、雑草は餘技といふ格である。併し此後ほとんど風に変化するかわからない。表と裏とが變更されないとはいへない。何しても、無駄に草を引いて、庭園に植ゑたのでは、一向につまらないのだから、何とか落着く先ができるに相違ない。

一株の雑草が、萬一にも地方産業の一助として、役に立つ日が來たらば、素晴らしいのだ。尤もこれは、考へ方によつては、徳川時代へ逆轉の觀もするが、今日はまた進んだ道があるにちがひない。資本と知識があれば、雑草研究は、現代に残された唯一の富源ともなると思つてゐる。

すべての事はこれからといふ感じが深い。秋も近い。山野に秋草が充ちてゐる。森林には菌が香氣を放つてゐる。これも雑草の一種だ。秋草見物、きのこ狩もやりたい。何と愉快なことではないか。今年は凶年とかで、米作が悪いといふ豫報が報道されてゐる。此際雑草でも食べて、生きられることを研究したい。

我々の前に雑草時代を實現させたい。今迄輕蔑し踏みにちつてゐた雑草が、一朝



人生幸福のために役に立てば、これほど、芽出度い話はない。武藏野雜草會の仕事は、澤山ある。地方の人々も参加してもらひたい。東京附近の同好者も入會して共に働いてもらひたい。人々が多ければ、多いほど良いのだ。

附記

この原稿は昭和九年八月三日に脱稿して、昭和九年九月號の雜誌改造に掲載されたものである。當時は、武藏野雜草會がまだできたもので、従つて會員も熱心に、非常な意氣込でゐた。日毎に會員の増加するに連れて、ついには會員相互の感情もいろ／＼と面倒になり、四五年を経過するうちに、ついに分裂して會員は二分し、一つは雜草會に、一つは野草會になつたが、其内に世の中も變化して、皆毎日を忙しく暮すやうな状態になつた。雜草會も解散したのではないが、暫く停止するといふことになつて今日に到つてゐる。

それでも、最初諸方から言句が出た「雜草」といふ文字も、最近では一般に用ひられるやうになつて、時折は食用の雜草に就て、植物學者が新聞紙に書いてゐられ

るのをみることもある。こんな場合も「雜草」といふ文字を使用されるやうになつた。これは、我が雜草會の刺戟によるところも多いかと思つてゐる。

また最近では、代用食としての雜草といふことも、眞面目に考へられて來たし、産業として雜草の利用法も研究されてゐる。これ皆我が武藏野雜草會の研究題目として、最も重要視されてゐた所、時運がこゝ迄進展して來たのだと思ふと、雜草會の創立も無駄ではなく、むしろ時代の先驅者であつたと思ふ。

萬葉集 卷十

春日野に煙立つ見ゆ乙女らし春野のうはぎつみて煮らしも

萬葉集 卷八

明日よりは春菜つまむと標めし野に昨日も今日も雪はふりつつ



春の雑草の美



武蔵野に咲くウケラの花



春の草の美といつても、春の草ばかりが美しくいふわけではない。夏の草も秋の草も、冬の草も、みんな美しいのである。今は春だから、特に春の草を中心にして語るといふだけのこと、尤も、春は冬枯れの状態を脱して、一躍して目醒むるばかりの生彩を輝やかす季節だから、一倍人心に激しい美感を覚えさすといふ特殊な立場に在るから、春は美しいと印象させるにちがひない。さて、春の草の美は、どこにあるかといへば、先づ芽の出たところ、即ち若芽にあると答へたい。

次には、花の咲いた所、結實した状態といふ調子だが、先づ何よりも若芽の伸びる有様ぐらい力強い美しくしさは、他にあるまい。草には限らずとも、樹木の芽も同様に、生の力といふものを感じさせる。この美しくしさは、春でなければ観られないものかと思ふ。朴とか百合の木等の芽は、實に美しい。雑草では、イタドリや紅い若芽、ギバウシ、カンザウの緑色の芽等は、春の最も楽しい美しくしさとも言へや



うと思ふ。

二

花では、春らしいといふ條件から、タンポポ、スミレ、オホイヌノフグリ、ニリンサウ、フデリンダウ、ウメガササウ、イチヤクサウ、ヒトリシヅカ、カタクリ、オキナグサ等が、春らしい感情に充ちてゐる。殊にニリンサウ、オキナグサは代表的なものかと思つてゐる。其他ヤブヘビイチゴ、キジムシロ、ジウニシトエ、ムラサキケマン、イカリサウ、ハウチヤクサウ、フキ、等限りもなく挙げられる。

武蔵野の雑草群のうちでは、スミレ、タンポポといふ古典的でなく、近代的の感じのするオキナグサ、ニリンサウに指を折りたくなる。濃紫のオキナグサ、淡紅色のニリンサウ、共に近代武蔵野を物語るモダンな感じがある。併し、これは一例にすぎないので、草の名稱を挙げれば、春咲く雑草はまだ澤山あつて、何れも特殊の美觀を備へてゐないものはない。總て美しくいふ言葉が、最も適當してゐる

のだが、それではあんまり曖昧すぎるから、すこし説明を加へたにすぎない。

我々武蔵野にすむ者は、武蔵野の雑草といふものに、否その言葉のもつ魅力に、強くひきつけられるが、さて、武蔵野に自生してゐる雑草は、特別なものかといへば、そんなことはない。全國一般のものと變つた所もない。たゞ武蔵野といふものを、我々は文學的にみてゐるといふに過ぎない。大和の草も、河内の草も、優劣は全くない筈で、自然はすべて美しくいのである。高山植物も、海岸植物も、皆美しいのだが、我々の生活感情といふものは、日本の歴史から離れることができないので、此草は萬葉集にある草だとか、この花は獨歩の武蔵野に出てくる花だとかいつて、特に注目する。

三

近頃はハイキングといふことが流行となつて、鐵道でも「空高くハイキング」の標語をかゝげ、山野を散策する者を誘つてゐる。このハイキング趣味に、一步を進



めて、雑草を観察するといふ自然觀賞の態度を加へたならば、更に申分がない。植物學的觀察でも、美術的鑑賞でも、各人の好むところに従つていゝのだが、とにかく自然を観察して歩くといふのは、甚だ好ましいことで、その趣味は、非常に高尚なものだと思ふ。これに、前述の歴史的感情を加味できると、更に完璧に近くなる。斯くの如き趣味は、我々の生活を豊富にするばかりでなく、我々のぐるりに迄も善果を及ぼす。

去年から我々同好の者が集まつて、「武藏野雑草會」といふものをつくつて、毎月一回山野を廻つてゐるが、非常に面白い。會員には美術家は勿論だが、其他會社員、學者等も居る。この種の會を全国的にしたならば、申分はないが、せめて一人か二人でもいゝから、各地方に雑草を観て美しくと思ふ人達が出るといゝと思つてゐる。春の草から始めて、夏の草、秋の草、冬枯の有様を眺めるのも詩味が深い等と、感じるやうになれば占めたものだ。

冬季の山林に落葉を踏み、淋しい音に耳を傾けて、清らかな空氣をほめ、やがて

再び春が訪れ出すと、ミツバツ、ジの紅色の花が咲いて、ワラビ、ゼンマイの卷葉に、曲線美の極致を観察して、イタドリ赤い新芽に生活力の旺盛といふ感じを受ける頃になると、オキナグサ、ニリンサウ等も咲き出す。カタクリの紫色の花は、優美の代表者の如く、雑木山の枯葉の中に咲く。

冬といふ季節を通過して、華やかな、明朗な春の陽を浴びて、人々は今更のやうに、春の價値を痛感する。この明暗はいろ／＼の意味に於て、我々を育て、呉れる。同志と伴れ立つて、春の山野をあるく、草を観たり、摘んだり、鳥の聲をきく、其處に必ず知識は拓ける。健康も得られる。人間はやはり自然の兒だといふ氣持にかへる。セチガライ世の中に、これが一番の良策だと思ふ。

慾を出してはいけない。散歩に慾は禁物だ。たゞ何となしに、目的も無く歩くところに、意味が深いのだ。ルツクサツクに食物や水を用意して、寫生帖の一冊も入れたらば、それで澤山だ。高山なら別だが、東京附近の低山趣味は、それで足りやう、花をみては感じ、樹々を眺めては欣び、漫然と一日を暮らすのは、だれにでも



できる楽しみだ。殊に畫家は、必要な生活の内に數へてもいゝ位だ。

四

「草を眺める」これだけで澤山だ。植物學の知識もいらぬ。藝術家らしい觀方も、詩人らしい感傷も、すべてを棄て、無心にブラ／＼と歩く、只これだけで澤山だ。人間の生活には慾を離れた時間といふものが、だれでも必要だ。殊に藝術家の慾張つたのは慘めすぎる。春の草を無心で眺め、其美に打たれる人は幸福だ。それで生き甲斐がある。

野原には、ニリンサウが若芽を出しかけてゐる。ワラビも卷葉の仕度ができ上つてゐる。我々 登山の仕度をして、登山靴に油をぬつて、何日でも出立できる用意が肝要だ。白樺の若葉に初夏の風を受けて、山路をあるくのも近い。アツモリサウの花に、ヨシダの蔭に、美くしい色と線を發見してよろこぶのも、山の幸である。水邊に水草を尋ねて、靜かな面を賞すのも、海岸に濱草を摘んで、潮の香に晴れた

海を見渡すのも、すべては楽しい一日の行樂である。

雑草をみるといふことは、やがては自分をみるといふことになる。自分の姿を眺めるのは、これはいつ迄眺めても、盡きることのない無限である。春に、夏に、秋にまた冬に、何年くり返しても、これで終りといふ時は來ない。優れた藝術は、いつ迄みても果てしがたい。人間の一生もまたその通りだ。春の草は永遠に若く美しい。

萬葉集 卷八

石走る垂水の上の早蕨の萌え出る春になりけるかも

萬葉集 卷八

山吹の咲きたる野邊のつほすみれこの春雨に盛なりけり





オキナグサ

早春の野山を飾るオキナグサ

著者 寫生

羊齒類の採集と鑑賞



羊齒類を鑑賞するといふことは、我國ではまだ稀れな方で、この點諸外國とはくらべものにならぬ。外國では早くから羊齒類を集めて、これを鑑賞したり、觀察することや、研究することが素人の間に流行してゐて、その爲には、専門雜誌の刊行羊齒學會の設立と、様々な設備がされるところも珍らしくない。

蝶類の蒐集にしても、非常に分科的で、バルナシユウスだけを蒐集する學會もある位だから、シダ植物の方も、ポレボヂユムだけとか、アジャンタムだけとか、ドロプテリスだけとか、分科的に蒐集研究する會もあるに相違ないと思ふ。もちろんその蒐集は世界的で、自國産に限るのではあるまい。

我國でも、羊齒學會が設立されて、機關雜誌でも出し得るやうな時代が來ると面白いと思つてゐる。今日の我國は、昔の日本ではない。シダの本場南洋諸島の領土をもつた大日本だ。せひとも、シダ學會を設立させて、採集と分類と、培養とを研



究したい。専門の羊齒學者はいふに及ばず、素人も加入して、シダ趣味を普及することは、花の咲く植物よりも地味だが、深い味がある。

羊齒類の感情は、太古を想はせるやうな、原始的の感情で、トカゲとかヘビとかいふ怪しい動物と共通した面白さだといへる。つまりは、曲線の表現する優艶と神秘との境界である。暗い蒼白い世界に繁茂する植物だから、怪しい曲線の奏する音楽が有る。この曲調は、我國でも南方的のもので、香氣に充ちてゐる。繪でいへばベックリンの作品のやうに、皮相的の神秘感ではないが、ルドンのもつ妖氣はたしかにある。

この羊齒植物を庭前に繁茂させることは、庭を文學的なものにする。ガリアやカナナを植ゑた花園は、繪畫的かも知れないが、文學的ではない。すくなくも瞑想的ではない。樹蔭に羊齒を植ゑて、トカゲでも遊ばせたらば、我庭園もジャングルの感じが出るかも知れない。すくなくも魔法使の出る舞臺らしくはなる。

二

南洋新領土の羊齒類は、本場でもあるし、いふ迄もなく面白いと思ふが、東京で培養するとなると、温室の設備が必要だ。これでは一般向ではない。それよりも、だれにでも手軽に採集ができて、北向の暗い庭園にでも植ゑて、鑑賞し得るものゝ方が素人には適合してゐる。

羊齒植物は幸ひ、東京の郊外にも相當な種類も産するし、觀賞に價する美的なものもすくなくない。大阪には、金剛山、箕面山、京都には貴船、宇治などの産地がある。其他地方の都市ならば附近の山へ一步踏み入れたら、澤山の種類が採集できる。勿論各地それ〴〵の特産種もあるし、地方型もある。これ等を採集して標本を作るのも肝心だが、鉢植や露地植として培養しても、甚だ面白いものだ。

東京附近ならば、武蔵野もいゝが、奥多摩の山々へ行けば、かなりの珍種に出會ふことがある。中には移殖の困難な種類もあるし、容易なものもあつて一様でない



所に變化もある。

昭和七年頃、我々の仲間で、武蔵野雜草會といふ素人の植物採集團體をつくつて採集と培養とを試みたことがある。私は羊齒植物が好きだつた關係上、此の方面集受もつたが、其會は五六年續けて、今は解散したやうな姿である。其後も私は個で、羊齒類の採集をやつて、今日も尙その續きをやつてゐる。然し素人の私が採人するのだから、名稱といふものがよくわからない。何といふシダだか判然としないものがある。羊齒植物と同時に甲蟲の採集も初めた。此方は步行蟲科の採集である。羊齒も步行蟲も共に分類の困難な、地味で陰氣なものだ。華麗な花や、美しい色彩の蝶類には、どういふものか、氣が進まないのは、私の性格の致すところかと思ふが、一方また判然としないものほど深いやうに感じるのが人間の通有性らしくもある。人間生活でもその通りで、毎日判然と規律正しい生活を繰返して、十年一日の如しでは、機械のやうになる。どこか曖昧なところがあつた方が、變化もあるし面白味も深い。

動植物の採集もやはりそれに似て、判然としない未解決らしいのも面白い。尤も其専門家の方からみれば、羊齒でも、步行蟲でも、全部研究が届いてゐて、未解決なんぞは一疋もない筈だが、素人の情ないことには、どうも判然としないものが残る。例へば、イヌワラビといふシダは、どこでも茂つてゐて、東京では一番普通なるシダだが、このイヌワラビの變種に、ニシキシダと稱する美くしいのがある。この方は、山地に自生してゐて、やゝすくない。そのニシキシダを美くしいから採集して歸つて、庭前に移植して置くと、一二年経つにつれて、イヌワラビと變らない色彩になつたり、春の葉はニシキシダだが、夏の葉はイヌワラビになる。つまり暑いから還元するのもかも知れないし、それとも色彩の變化は、一時的の現象だつたのかどうも判然とした答へが得られない。人は判然としないものに、未練が残る。步行蟲でもクロナガヲサムシなどは、やはりその判然としない組だ。

三



東京附近にある羊齒で、何が培養し易いかといへば、クサソテツだ。これは姿も立派だし、趣きもある。殊に春の新芽の曲線がギリシヤの唐草模様のやうに美しくい。イタチシダも光澤がいい。ベニシダの赤い芽などは素晴らしい色調のものだ。こんなやうに數へ舉げるとみんな良いことになる。

奥多摩に行くと、岩石にクモノスシダといふ珍種がある。これは移殖に骨が折れる。クモノスシダよりも更に面白いのは、イハウラジロ、ヒメウラジロ、イテフシダ、オホクボシダ、カラクサシダ、オクタマシダ、これ等の稀種は、自慢にはなるが移殖は先づ絶對にといふほど困難らしい。

逗子の神武寺に産するフモトカグマは、逗子特産の羊齒らしいが、鉢植としては容易に繁殖して樂しめる。アマクサシダ、クジャクシダ、ハコネシダも同様にやさしい組だ。鉢植として涼しさうなのは、ハコネシダのこまかい葉が、風に吹かれる風情だ。瀧でもあしらつて、イハタバコと植込にすれば、夏の御馳走となる。

キンマウワラビは毛の色が黄金色の光澤で、實に贅澤だ。石灰岩に着生してゐる

美しくしきは、正にベルシヤの高貴な敷物の感じがする。これ等はすべて、東京附近に自生してゐる羊齒で、採集にも樂だし、研究にも鑑賞にも良い。京都や奈良や宇治には、また別な種類があることと思ふ。地方によつて分布も様々だから、各地の人が採集鑑賞したならば、思ひの外趣味ある結果が擧げられるに違ひない。

關西に普通なチャセンシダ、カミガモシダ、コタニワタリ、アヲネカヅラ等は、東京にはみかけないが、羊齒としては優秀な方だ。カミガモシダ、オリヅルシダ、ツルデシダ、クモノスシダ、この種のシダは、葉の先端から芽が出て繁殖するから形態的にも珍奇なものだ。然し鉢植としては、充分に本能を表現しないのが、いかにも惜しい氣がする。この種のシダも研究次第では、自然の生態が現れるかとも思つてゐる。

#### 四

標本を作ることも、名稱を知る上からみて、是非ともやらねばならぬが、標本は



面白くないからといふので、作らずにゐると、いくらたつても名稱を覚えられない。分類學といふのは、素人には必要もあるまいし、専門的になりすぎるが、標本位は所蔵してゐて、採集の時に鑑定するのに役立てた方がいゝ。名稱を知らぬと趣味が深くなれないし、永續性が乏しくなる。

シダ類は標本としても綺麗だし、作るのに樂だ。標本を用意して、名稱が記入してあれば、いかに種類が多くても、何とか判定がつく。それでも不明ならば、鑑定を乞ふといふ便宜も得られる。何しろシダは類似のものが多いから、慣れないと判断がつかない。

道端にあるシダが、イヌワラビか、ベニシダか、ホソバシケシダか、ヒメワラビか、何が何んだかわからぬやうでは淋しい。だから、東京附近のものは概略すぐ判るやうにしたいものだ。これ位の知識は何人も用意してしかる可き筈だ。シダに限らず、蝶でも、甲蟲でも同じことがいへる。我國は領土が急に廣くなつて、北から南に延びたのだから、動物や植物も素晴らしい數に達した。これをすべて調査する

といふことは、大變な話だが、せめて我々素人の手で、附近のもの位は採集して、専門家に鑑定してもらひ、植物分布學の一端でも手傳ひたいと思つてゐる。これには、必要な標本を作ることが肝要だ。標本を作るにも、普通なもの稀なもの位の判定は、素人でも心得てゐないと、同じ標本を何枚も重複させるやうなむだ骨折りが生じ易い。

要するに、羊齒類を手あたり次第に採集して、培養すると同時に、二株を標本に製作し、名稱の鑑定を求め、それがすんだらば、次のシダを採集するとか、武藏野から始めて、奥多摩に及ぼし、一應の調査が終つたならば、次は更に神奈川縣とか他の近縣へ延してゆく方法をとる。旅行の折りがあれば、忘れずに、地方のシダを採集して歸つて培養、標本の二た通りをやつてみる。

斯くて何年かの後には、附近は卒業するから、その時はマレーでも、ボルネオでも、アリユシャン群島でも、日本全國は勿論、近い外國産のものまでも、参考に蒐集して、研究すると、羊齒の分類や分布學には多少通じられる。



茲に到つて、羊齒學會の設立が必要になつて來る。雑誌の發刊も自然と望まれて來る。陰氣なシダも明るくなるし、妖氣も退散して、光明かがやく世界の植物となる。我々の趣味はやがて羊齒を離れ去つて、苔に移るか、バクテリアにでも飛ぶかも知れない。それは何年後の話だか、まだ遠い未來の世界らしい。

當分は、やはり陰氣漾ふ羊齒の世界は、神秘の霧に包まれて、暗い葉蔭に歩行蟲があるく、原始の姿を失ふこともあるまい。

萬葉集 卷十一

我が<sup>ヤト</sup>屋戸の軒の子<sup>シダ</sup>太草生ひたれと戀忘草見るに未<sup>いま</sup>だ生ひす

趣味の採集



我々が植物や昆蟲を採集するのは、趣味の爲だとだれもいふ。ところが、その趣味といふ意味は極めて曖昧で、この解釋は各人に依つて相違するやうに思ふ。専門家以外の人は趣味家と思ふのも多いが、これはどうも適當ではない。植物を採集してゐるうちに、名稱を知り分類を知り、やがては原記載を讀むといふやうに進展する。斯うなると専門家とすこしも變らぬ學者である。たゞ大學で植物學をやつてゐないといふだけだ。

素人畫家でも文展へ二三度入選すれば最早専門家だ。趣味ではないやうにみられる。ところが、それは大變な間違ひだ。素人の採集でも、決していゝかげんな曖昧ではない。學問や藝術に關係する以上は、假りにもいゝかげんな態度は許されない。根が難かしいものだから、それをやさしく直すことはできない。

趣味はそんな遊び事ではない。一生懸命にやつて始めて趣味が得られる。こゝでは、専門家も素人もない。それにたづさはる者は、等しく同様な立場に在る。たゞそれを業とするかしないかの相違だけと思ふ。植物學の教授とか、昆蟲學の先生と



かは、専門家といへる。畫家として生活してゐる人は専門家だ。商人が繪を描いて文展に出品しても、それは素人だ。決して畫家とはいへない。

趣味は其學問を深く究めなくては湧いて來ない。一疋の蝶を採集して展翅してもそれでは趣味を獲られない。充分に研究しなければ何んにもならない。子供が遊びに蟲を捕へるのと變らない。大自然は、深くさぐればさぐる程、ますます神秘になる。これ押し透してゆく所に趣味が湧く。自然科学でも、藝術でも同じことがいへる。我々が、山野を歩き、蟲を追ひ廻したり、花を折るのは、繪を描くのと同じに、大自然の一端に觸れたい願ひからやるので、何も單に遊戯の爲ではない。

態度が眞劍ならば、眞劍ほど、そのよろこびも大きい。従つて趣味も深くなるといふわけで、人間らしい生活に近接できる。自然を知るといふことは、人間を知るといふ事でもある。これに上越す面白さはない。古來、世界の偉人は、皆それが爲に一生をさゝげてゐる。我々も及ばずながら、それを見習ひ、貧弱ながら出来る限りは努力す可きだ。

世界の哲人、科學者、藝術家は皆一生を棒に振つても、我々の爲に盡して呉れた。我々もまたそれを眞似て、自分の力の及ぶだけは、やりたいものだ。こゝに眞の生甲斐を感じ、趣味も湧き出す。こゝ迄は是非とも行きたいものだ。文化は進み國は光り輝くに相違ない。

世界の文化は、各人の努力によつて進む。日本の文化は我々の骨折り次第で進展する。何もせずに暮らせば、いつ迄待つても進むものではない。僅かな時間でも無爲に過ごすことは惜しい。山を行けば山の姿を、野を歩けば野の物語りを、蟲をみれば蟲の生活を觀察する。翅體の研究をする。植物、動物、歴史、地理なんでも良い。藝術も良い。經濟でも法律でも差支へない。要するに人々の態度に在る。

彼のファアブルの昆蟲記などは、實に詳しい記録だが、あれなどは何も難かしい仕事ではない。忠實に自然を觀察すればだれにでもできる仕事だ。これが人間の文化に利益があるとすると、一時間も無駄に暮すことは勿體ない。殊に近來貴重な食糧の配給を受けて暮してゐる我々が、何もせずにあつては申譯が無い。



婦人達にもやれる仕事は澤山に残されてゐる。家庭の主婦は、家政に育児に忙しいが、まだ相當に下らぬ世間話しに時をすごしてゐる。これも自然觀照に振向けたものだ。藝術觀照に向けても結構だ。斯くて教養を積むことによつて、一家庭の文化は向上する。欲張つた買溜根生は解散する。主婦の向上は育児にも、主人の生活にも影響して、たちまち社會は善くなると思ふ。愚劣な利己主義や、狭い個人主義は消失する。

美術を観ることをすゝめれば、二言目には「私などは趣味のない人間で、繪をみても判りません」とか「西洋音樂は解りません」とか「趣味のない」といふ理由で逃げ口上をいふ。相當教育を受けた婦人達でも、趣味の無いことを自慢の如く吹聴して、恥かしくも思はない。そのくせ、衣服の色合とか柄などに就ては、自分の好みをもつてゐる。着もしない衣服を澤山死藏してゐる。これも欲張からか、下らぬ優越感にかられる爲か、それとも趣味か、持つてゐない筈の趣味だとすると、裝飾は判るが美術はわからぬといふことになる。

婦人はもとよりだが、男性にも此種の自慢家は澤山ある。中には西洋音樂はわかるが、日本音樂はわからぬといふ人もゐる。日本畫は判るが油繪はわからないといふ人もゐる。こんな人も怪しい人だ。元來趣味といふものは、研究に依つて得られるものだ。一寸視た位で何がわかるものか、努力しない人には何も與へては呉れない。

我々は物資の買溜を棄て、知識の買溜をしなければならぬ。殊に大東亞の指導者としての日本人は、今までよりも更に更に、豊富な知識の主人とならなくては、指導者としての資格に反する。古今東西の文化はもとより、新しい文化建設に對しても、充分な資材を用意す可きだ。

美術は美術家の爲に存在するものではない。學問は學者のためには在るものではない。人間である以上は、人間のやる事は何んでも理解できぬといふ筈はない。理解して始めて生きた學問となり、生きた美術となる。宗教は死人の爲ではない。すべては生きた人間の爲のものだから、これを十二分に活用して、こゝに立派な文化は



建設できる。

理解の在るところに、趣味は生じる。この趣味こそは眞の趣味で、遊戯ではなく、眞剣な生活其物の姿でなくてはならぬ。茲には老人も若者もない。男性も女性もない。人間、人間の姿が嚴然と現れる。

昆蟲採集の思ひ出



昆蟲の採集と研究は、私の一生を貫いた趣味となつた。同時に我家の趣味として、三代繼續してゐる趣味でもある。今日はその歴史に就て語つてみることにする。

私の祖父といふのは、徳川幕府の高家といふ家柄で、織田對馬守信愛と名乗つてゐた。先祖は織田信長で、信長の次男、信雄の血統である。それで對馬守の祖父は非常にハイカラで、早くから自然科学に興味をもつてゐた。常に介類、昆蟲類、植物等を蒐集して楽しみとしてゐた。

現在、いま全國に分布してゐる外來の草花で、マツバボタンといふのがある。あれ等は最初に外國から種子をとりよせて、庭前に植ゑたのが祖父の仕事らしい。間もなく出入りの植木職が種子を持出して、諸方へ頒布したのがもとで、現在のやうに全國的になつたといふ話を、祖母がして呉れた。祖父は自然科学の他には、繪畫も好きで、よく寫生をした。動植物の寫生は殊に上手だつた。そのうちにも介類



の寫生は特に優れてゐて、眞に迫つてゐる。介類の寫生は量も非常に多く、積み重ねて、一メートルの半分位の高さになる。

祖父の介類寫生圖は、現に故東禹兄の遺兒が保管してゐる。私は、植物の寫生を僅かに一二枚祕藏してゐるにすぎない。畫風は日本畫であるが、光線陰影をつけて江漢流の洋風畫に近いものだ。この祖父は幕末に及んで、徳川方の海軍奉行、陸軍奉行の職に就いてゐた。(雜誌新舊時代參照)其後、上野の戦争に敗れて、宮家のお供をして逃げたのも、この祖父と若い父とである。當時使用した關所の手形、通行證の類は、現に私の手元に保管してある。

明治になつて、開拓使となつたり、後に博物館にも奉職したこともある。其間には、様々な話もあるらしいが、詳しいことは知らぬ。とにかく進取的な人であつたことに間違ひもない。海軍奉行時代の寫真をみると、海軍の禮服を着けて、テールの上には、ウエブスターの辭典と、シャボテンの鉢植を置いて有る。當時としては頗る歐化したものだと思心させられる。

寫眞術もどうやら祖父が外人から傳習したらしいが、その詳細は不明である。日本の寫眞術は、下岡蓮杖といふ人が開祖といふことになつてゐるが、祖父は下岡よりも一步先に修得してゐたらしい。然し確證は遺つてゐない。とにかく撮影したとは確實で、何枚かの遺作も残つてゐる。其内には、徳川幕府の軍船を幕命によつて、奉行の資格で撮影したのは祖父で、當時の華々しい有様も、話しにきいてゐる。祖父と家來達は、一そうの船に織田家の定紋打つた紫の幔幕を張り廻らし、旗のぼりの類を隅田川の朝風に吹き靡かせて、軍船を撮影したといふのだから、その有様は一枚の繪となる。

現に其内の一枚「小鷹丸」といふ軍船の寫眞は、私が祕藏してゐる。其他のすべては、海軍省へ納入したが、或は大震災で焼失したかも知れない。

二

祖父の血を享けた私の父は、更に自然科学が好きであつた。父は明治初年に外國



から来た動物採集家とは、總て親密に交際をしてゐた。蝶類の採集家で、日本の蝶類目録を最初に発表したブライヤー、甲蟲學者ルイス、鳥類學者ブラキストン等とは、その中でも親交が深かつたらしい。ブライヤーの目録中には、父の名がN. O. G. として諸所に散見される。現在私の日常使用してゐる昆蟲用品の内には、ブライヤーから寄贈された昆蟲専用ビンセット、標本箱、蟲眼鏡等が遺つてゐる。

ルイスとはどれ位の交際であつたのか、詳細は不明だが、同氏から贈られた甲蟲標本の二、三はまだ私の所蔵するところとなつてゐる。同氏著「日本甲翅類目録」一卷も、私の藏書中に在る。この目録は、ブライヤーの蝶目録と共に、日本産の昆蟲分類目録中最古のもので、今日の進歩した眼からみれば、不備な點もあるが、とにかく日本昆蟲學史の上からみて、重要な文獻であることに異論もあるまい。

其他、オホストン等も知つてゐたらしいが、それに就ては何等きくところがなくつた。その後、英人ワイルマン氏、米人ジュリキ氏、前者は蝶蛾類、後者は陸産介類の研究家、ジョナス氏、これも蛾類の研究家であつた。これ等の人達は、私も

父と共に度々訪問した關係から、皆その顔貌を記憶してゐる。

父は明治初年に、動物剝製の術を外人から傳承して、やがては一般の求めに應じて、動物標本の製作を始めた。これは我國に於ける最初の事業だつたと思ふ。宮内省御用を命せられたり、帝室博物館の御用も務め、博覽會等で賞を得て、剝製では第一人者であつた。明治文化史には特筆されて然る可き人だと信じる。

母もまた剝製の達人で、特に魚類の剝製術は母の創始した方法に據るのが良策と書いてゐる。現に上野の科學博物館には、帝室博物館から移管になつた古い標本を幾多藏するが、其内には父母の手に成つた剝製が必ず遺つてゐると思ふ。

## 三

概要斯くの如き父母の間に生れた我々兄弟が、無關心でゐる筈はない。何れも父母、或は祖父の趣味を受け次いで、繼續者となつてゐるのに不思議もない。長兄の規久麿は剝製術を、次兄の東禹は、鐵砲と釣魚、三男の久は鑛物學を、最終の私は



昆蟲學といふやうに、兄弟各自が分擔して、父の趣味を受繼いだのは、面白いことだと思はれる。殊に長兄を除いて、残る三人は、相談でもしたやうに、皆揃つて洋畫に志したのも、祖父からの遺傳に依るのではあるまいか。趣味の遺傳といふことは、實證されてゐるか否か、その邊のことは知らないが、私の家系からみれば、確かに其觀が深い。

私が昆蟲採集をやり出したのは、確實な年代は忘れたが、何んでも七歳位の時で當時住居してゐた麻布の市兵衛町で、蝶々を追ひ廻した事に始まる。當時の麻布は郊外の感じで、我善坊邊には、ツマキヲフが菜の花に飛び、アゲハがカラタチに来てゐた。青山の墓地あたりは、全くの田舎で、田や畑や、雑木林があつて、人家は農家でも稀れにしか無かつた。時折りは、澁谷邊まで採集に出掛けると、現在の吉祥寺よりも、はるかに郊外の感じが深く、樹木も多かつた。駒場の採集地といふと絶好なもので、蟲の種類も多く、奥多摩などよりも豊富だつた。

冬は父に連れられて、よく澁谷田圃へ鳥打に行つた。サギだの鴨だの、シギ等も

居た。父のうつ鐵砲は、外國製の二連發だが、玉を先から込める先込銃だつたので急ぐと鳥を逃がした。今、澁谷の街を歩くと、どうも變で仕方がない。子供の時分にみた澁谷とは全く別なもので、夢のやうでもある。

明治二十五年頃に、芝の愛宕山に始めてアーク燈がついた。愛宕山は夜もひるのやうに明るくなつた。當時私達一家は、愛宕下に居住してゐた關係から、毎朝早くアーク燈の下へ行つて、落ちてゐる昆蟲、蛾類、甲翅類等を拾ひ集めた。

夜の明けない暗い内に行つて、急いで拾はないと、夜明けと共に小鳥が来て、食べてしまふので、父と私は、暗いのに出掛けた。暫くすると、芝の家から麻布の椀町へ移轉したので、毎朝愛宕山迄通ふのが大變な骨折りだつた。私は其年の夏、トリ目にかゝつて、暗い所は全く視られなかつたので、毎朝父に手を引かれて、愛宕山へ登つた。トリ目は榮養が不足すると、かゝる現象だから、當時貧乏のドン底に居た父の生活が、病原だつたらしいと察せられる。この時代の貧乏話しは、いまでも澤山記憶に残つてゐる。



それはとにかく、愛宕山の電燈で採集した昆蟲には、相當に珍物があつた。現今でも私の標本箱には、當時採集した甲蟲の二三が保管してある。これも絶好の記念品と思ふ。蛾類は一疋も遺つてゐないが、寫生したものは、相當にある。とにかくいろいろの意味から、愛宕山の採集は忘れ得ない印象を刻みつけてゐる。

四

愛宕山の採集は、明治二十七年で終つて、私達は大阪に移住した。大阪に於ける生活は、別に書いたから、それは略して(石版隨筆参照)私が獨立して單獨で昆蟲のコレクションをやり出したのは、明治三十八年頃からで、父の死後である。父から渡された標本、文獻、用具等を死蔵してもつまらないし、私も好きな道樂であるから、郊外寫生のついでに、蟲を採集する事にきめた。

これが動機となつて、佛人ガロア氏とも親しくなり、一緒に採集にも出掛けるといふあんばいで、私の蒐集も可成の量に達した。この分で今日まで續けてやれば、

素晴らしかつたのに、惜しいことに中絶して、折角の蒐集した標本も、蟲に喰はれたり破損して、全部を無くした。尤もルイス・ガロア氏等から贈られたものや、愛宕山時代のものは、全部でもないが、大體残つたので、せめてもの仕合せと思つてゐる。

中絶の間は、約十ヶ年位で、昭和七年頃から再び採集病に感染して、再起することになつたのは、不思議なものと思ふ。

再起に關して、主な動機と思はれたものは、東京の郊外、吉祥寺に住居を移したのがもとで、朝夕蟲と親しむ生活に這入つた事から、私をして再び昔の採集をやり出させる動機となつたと思はしめる。吉祥寺井の頭に、平山博物館が有るので、蟲の標本を観ることが多かつたのも、刺戟になつた。殊に近年登山趣味に感染して、山の風景、山の植物、山の昆蟲と、結局は昔の趣味にもどつて來た。何も新しい世界に移つたのではない。舊宅へ復歸したと同じことで、其間進展も何もないのである。歴史は繰返した迄のものだ。



ところが、歸つて來た舊宅は、昔の佛はなく、甚だ進歩してあた。ルイス。プライヤーは勿論、ガロアの昆蟲採集も、今日となつては、先端を行くものでない。いつのまにか世間は、自然科學の重要性をみとめて、アマチュア昆蟲學者が續出してゐる始末。特に關西地方は、これ等採集家に恐れをなして、採集禁止の山林もあると聞く。何事にも雷同者はあるから、仕方もないが、これが健全な發達を希望する次第である。

五

祖父に始まつた自然科學趣味と、美術趣味とは、私までは曲りなりにでも繼續して來た。先年長兄の規久麿が死亡して、剝製の術は後繼者を失つた。東禹は自然科學とは關係のなかつた人だ。今、残るのは私の直ぐ上の兄一人だ。この兄は若い頃に、父から鑛物の部を譲られたが、途中で放棄した。私がこゝで昆蟲から離れると父の遺志は全く跡を絶つので、私だけは一生昆蟲を棄てまいと覺悟してゐる。植物

も同時に私が兼務するとしても、まだ澤山の項目が残る。

剝製術、介類學、鳥類、寫眞術、鑛物學等、祖父から父へ、父から私達へ渡された趣味の大部分は、後繼者を失つて消失する運命になつた。これは何とも残念なことながら、いくら私が慾深でも、餘り多くは受持てない。

私は私で、繪を描く、原稿も書く、石版、木版もやる。浮世繪の研究はまだ未完成になつてゐる。昆蟲、植物の趣味は棄てられないのだから、此上多くは望めない。私は自分を整理して、無駄の生活は一切やらぬことにしてゐる。やる仕事は専門の事は勿論だが、趣味方面でも徹底的に研究したい性格だから、餘り慾張ると自分が困る。それでなくても、登山は好きだし、芝居も好き、音樂も好き、讀書も好き、なのだが、それ等の一切は互に關係のある間柄だから、切離して獨立したものでない。

でも時間が惜しい位に忙がしい。酒をのむとか勝負事に夢中になるとか、世間一般の人が好む遊びは、一切やらぬことにしてゐる。それでゐて退屈してゐる時間は



無い。

近來は、更に整理改善して、昆蟲は步行蟲科、植物は羊齒類、版畫は石版、といふ調子に、範圍をせまくして、深くすることに努めてゐる。浮世繪研究も、全般的でなく、北齋を中心とした研究に止めることにしたが、これでも、随分と大事業で時間と金力のない私としては、可なりの重荷となる。

近頃更にまた研究の新項目を加へたから、ますます骨が折れる。だが人間は希望が多い方が、何となく生活が豊富になつたやうで、生き甲斐が感じられる。もつと若いと、南方へでも出動して、繪も描くし、昆蟲も採集したいが、何しろ無理はない方が、身體の爲だと思つて、野心的な望みはあきらめることにする。

庭前に羊齒類が茂り合ひ、座右に步行蟲が在り、石版の石には版畫が描かれて、室のすみには北齋が散亂し、音樂が幽かに流れるといふ私の生活も、父から譲られた趣味かと思へば、何は無くとも幸福な感じがする。

蜘蛛の美



蜘蛛は美しい色彩と、斑紋をもつてゐる。それに形態も面白いし、生活は更に深い面白味がある。これはだれでも知つてゐる事實で、今更またこゝにくり返すほどの必要はないと思ふ。

だが我國には未だこのわかり切つた筈の、蜘蛛の美に就て、記述された文學も、これを寫した美術も見受けた覚えはない。尤も見聞のせまい私一人が不幸にも、見受けないのかも知れないから、あんまり大聲にさげぶことは、遠慮す可きかも知れぬが、實際どうも無いらしいと獨斷的にきめてゐる。

然し全くないこともない。否大した文學が澤山遺されてゐた。これはどうしたものか、私は失言を謝さねばならぬ。困つてしまつたが、これには理由がある。それは、我國の古典文學に出て來る蜘蛛は、揃つて妖怪變化の一種とみて、文學的に扱つてゐるのが普通の有様で、これならば澤山ある。従つて江戸演劇またその轍をふ



んで、やはり妖怪として蜘蛛を魔物と扱つてゐる。この態度は、果して蜘蛛の美を表現したものであらうか、蜘蛛の美を禮讃したものといへやうか、俄に判断し得ないところと思はれる。

我國では、古來盜賊の類にも美をみとめて、彼の地雷也とか、石川五右衛門とかいふものは、演劇の題材として華々しく公衆の面前に登場してゐる。この場合は、盜賊も一個の美的對象として評價されてゐる。藝術は倫理と關係のない獨立した世界をもつてゐるが爲であつて、決して盜賊の味方になつたのではない。

吉原の花魁も、岡場所の白首も、水茶屋の娼婦も、藝者も、すべては美の對象として藝術の世界に復活される。倫理的の批判は、この場合に限つて許されない。藝術の世界に入つては、善もなく悪もない。きれいもきたないも無い。一切は平等に美化される。

ところが、蜘蛛を扱ふ人間の態度は、これとは全く反對で、逆の結果になつて現れて來る。人間だとたとへ盜賊非人でも、美の表現として扱はれるのに、蜘蛛は罪

もないのに、頭から恐る可き妖怪變化として、文學演劇の内に現れる。惡の讚美かも知れないが、惡意のないくもにとつては、甚だしい間違ひで、迷惑至極なわけである。こんな馬鹿なことではない。だから、私が蜘蛛の美を書いたものは無いとも考へるし、また澤山有るとも思ふやうに、判断に迷ふやうな變てこなことになる。

蜘蛛の倫理觀からこれを眺めたらば、人間といふものは勝手なもので、一度も化した實證を掴みもしない先から、妖怪とみたり、惡事を働いたこともないのに、惡者扱ひまでするとは、言語同斷だといふかも知れない。人間は、自分の同類だと、盜賊でも舞臺に出したり、賣女でも浮世繪に畫いたりして、讚美を惜しまない。全くわけのわからないのが人間だと思つてゐるかも知れない。これも一理あることだ。然し人間といふ奴は、弱い心の持主で、恐ろしいと思ふと、無闇と恐ろしい。疑心暗鬼といふわけで、最初だれか、蜘蛛は生血を吸ふと書いたのがもとで、生血を吸ふのは變化と速斷して、ついに妖怪變化の仲間に入れたのだと思ふ。蜘蛛こそ可哀想に、無實の罪に落とされてしまつた。



血を吸ふ動物は、蜘蛛に限るものではない。ノミでも蚊でも、人間の血を吸ふ生物だ。更に恐る可きものは、人間の中にも生血を吸ふやつが、世間にはさらに散亂してゐる。配給品をゴマ化したり、闇で金をためたりする者は、毎日の新聞にざらに出てゐる。これ正に妖怪變化の仕業であるから、速かに退治しなければならぬ。これ等の者共に、すこしも美といふものがない。藝術の世界でも、この生物はどうも救ふ道がない。

二

餘談はやめて、さて、蜘蛛を主題とした文學には、昔から種々あると思ふが、その内の一二を紹介して、例證とする。

- ①「昔、美作國高田の彌六といふ郷土が、別荘で竹椽に端居して假寢してゐると女郎蜘蛛が女に化けて、一夜の枕を交さんとすゝめ、遂に大厦高樓へ伴ひゆかれた話。

- ②「昔、京の五條烏丸大善院で、山伏覺圓が泊すると、夜二更に風雨山を崩すが如く、堂内震動すると、天井から大きな毛の生えた手が出て、覺圓の額を撫でたので、忽ち刀で切ると手筈があつた。終に二尺八寸ばかりの大蜘蛛となつた。

(①は太平百物語。②はお伽狗張子)

〔江馬務著、日本妖怪變化史〕

この他にも蜘蛛の怪物が人間を驚かせる物語は勿論澤山あるが、それ等はいま調査する必要がない爲に略すことにする。前掲の二例でも察しられる通りに、すべて取扱方が蜘蛛の美といふ方面かどうか、甚だ曖昧なもので、惡の讚美だと思へば、それらしくもあるし、無いやうでもあるし、困つてしまつた。

一方また美術に表現された方を見るのに、これも概して妖怪變化とみなして、その取扱ひをしてゐる。女郎蜘蛛などは、色彩の美麗な種類だが、「女郎は男性を迷はず」とか「蜘蛛は生き血を吸ふ」といふ二様の概念から、美しくとも油斷は禁物とみて、一應は魔性のものとして紹介されてゐる。これでは、如何におとなしい蜘蛛でも、憤慨するのは尤もなわけだ。



「生血を吸ふのは、てめえ達だ。男を迷はすのも人間様だ。餘計なお世話を焼かねえで、人間の世界でもちと改善した方が、お徳だせ。」と笑つてゐるかも知れない。

美術の作例として、外人のものを舉げてみると、ルドンの自畫石版に、人間の顔に長い足のはたやうな、いとも變テコな蜘蛛の繪が有る（世界美術全集 別卷 西洋版畫編一〇七ページ）これ等も魔物として紹介した作品の内では、傑出した方だ。この繪は、美術としては、あまり文學的になりすぎる感じはするが、元來ルドン自身が、アラン、ポーの影響を深く享けてゐる作者だから、蜘蛛に限らずこの人の作は、花でも人でも、すべて怪奇的な、文學的内容のものばかりだ。これよりも前述のお伽狗張子の挿繪の方が、雅味があつて、歌舞伎十八番にでも現れさうな蜘蛛を描いてゐる。だが、挿繪だから純正繪畫とは別だし、文學味も有るから、くもの繪として特に持出したくはない。

其他に、錦繪などにも、蜘蛛は随時に現れるが、すべて文學的、演劇的であつ

て、どうも繪畫としては第二義的なものが多い。これは怪物として蜘蛛を視るといふ態度、それがすでに繪畫的でないのだから、表現されたものも、繪畫的でないのが、理の當然といへるのである。今日以後は、この誤れる觀念をすて、改めて平然と蜘蛛の美を正面から、鑑賞す可きだと思ふ。

## 三

斯くの如く、妖怪として蜘蛛を表現するのも、やはり一種の惡の讚美に似てゐる。例へば盜賊を文學や劇に扱ふのと同じ意味に、なるものかも知れないが、人間の都合だと、惡人でも善い行爲をするといふこともあるし、善人と惡人とを對照して扱ふ場合もあるのに、蜘蛛は出さへすれば、必ず人に危害を加へるといふ損な役目に廻される。これでも讚美といへるかどうか、その邊は受合兼る。それよりも、もつと正直に、正面から蜘蛛の美をみとめて、それを扱つた文學なり繪畫なりがあつていい筈と思ふ。だが、そんなものは、全く無いといつても間違つてゐない位の有様



だ。僅かに個人の逸話の内に、それらしいものが遺されてゐるにすぎない。

「北齋、或時室の一隅を指し、娘お榮を呼びて曰く。昨夕までこゝに蜘蛛の網のかゝりてありしが、如何にして失せたりけん。なんぢしらずや。

お榮首を傾け、すかしみて、大に恠しみ居たり。

(飯島半十郎著 葛飾北齋傳 下卷)

原文とはすこしちがふが、こんな意味の逸話が出てゐる。如何にも北齋らしい面目が躍動してゐる。流石に一代の名匠、葛飾北齋でなければ、これだけの觀賞眼を備へてゐまい。北齋の畫室に蜘蛛の網、非常に意味深長な調和を示す。室内裝飾としても絶好なものに相違ないと思ふ。この話しは、くもの美を表面からみとめた話して、唯一の美談だ。

それから例の和氣清麻呂の話や、頼朝の洞穴の傳説などは、蜘蛛といふものを充分に觀察した上の話して、誠に佳話と思ふ。こうした物語は、世の中に多いかも知れないが、不幸にもあんまり私の耳へは入らない。尤も、平素研究的な心がまへで

居れば、いろ／＼聞き込むと思ふのだが、急ごしらへの蜘蛛趣味者だから、材料拂底を告げて來た。實績が無いから配給もないといふ次第らしい。

いよ／＼そろ／＼本題に這入ることになつて、先づ繪畫に出て來るくもの美といふ段取りになるが、これは材料ます／＼拂底だと逃げを打つてみたい。然し美術のことを知らぬでは責任上困ると思つて、前述のルドンを探し當てたが、あれは、妖怪變化だからといふ理由によつて、妖怪の例證に出してしまつたので、血眼になつて藏書を繰り返したが、僅かに北齋漫畫二編に二疋の略筆を發見した切りで、あとが續かない。光琳百圖には何かくもの網でもと考へたがこれも無い。

身代限りとなつて最早何處を尋ねる當もなく、クモを掴むに似て甚だ心細くなつて來た。歌麻呂の有名な「繪本蟲選み」には何か出てゐると思ふが、原本が手元に無いので、調べられない。それから現代のものでは、婦人の帯地などに、時折くもの網などの圖案化したもやうが見受けられるが、別にとりたて、述べるほどのものはない。



要するに蜘蛛の美を表面から寫生した美術といふものは、無いといふことに歸着する。造形美術には向かないのかとも考へられる。やはり文學の世界にまかせて、妖怪變化を甘受すべき運命にあるらしくなつて來た。

## 四

論より證據だから、實物の蜘蛛の美に就て、改めて觀察してみよう。斯うきめたものゝ、さてどうも困つた。色彩が美しくいとか、斑紋が面白いとかいつても、これは徹底しない。何しろ色彩の點になると蝶の方が、はるかに美麗だし、とてもクモ等の遠く及ぶところではない。斑紋の奇といふ方面も蝶や甲蟲には及びもつかぬ。蜘蛛獨特の美といふものは、色彩でもなければ模様でもない。やはりそれは「巢を懸ける」といふ所に、独自の美がある。この特技は昆蟲類や甲殼類、多足類にも眞似のできない輕業で、クモ獨占の生命である。どちらかといふと、蜘蛛は敵を攻撃に出ることよりも、多くは保守的に、陣地を守備して、來る敵を捕食する立場だ

から、色彩の如きも、保護色のものが普通となつてゐる。

一定の巢をもたぬ蜘蛛の浮浪者、ハヘトリグモの一屬は、保守的でなく攻勢に出て、到る所飛び着いて、生血を吸つて廻る。土蜘蛛も巢はあるがトーチカ式で、地上には餘り現れてゐない。カニのやうに穴の中にゐて攻撃するだけだ。クモの美しいのは、どうしても木の枝から枝へ、架設した網の美である。精巧に編まれたアンテナには、様々な形式があつて、何れも捕蟲用として立派な武器である。同時に美的價値も相當に高いものと思はれる。殊に面白いのは、夕暮頃の巢網を架設する工事だ。とてもサアカスや登山家のロッククライミング等の及びもつかぬ危険な動作を、彼等は平然とやつてのける。空中へ網を張り渡しても、夕立が來れば、工事が中途でも細部は直ぐに取はずして片付けて仕舞ふ。中には毎晩くり返すのは面倒だから、そのまま残して置く不精者もある。この一群は絶好な空間へ巢を懸けるといふことは望まれない。

また或ものは、樹木の葉の繁つた所とか、室の一隅とか、邪魔にならぬ破損しな



い場所へ常設する。形式もハンモック式の、落ちて来るものを受止る仕掛けになつてゐる。中でも、ハンモックの隅にトンネルが附いてゐて、奥に主人が眼を光らせてゐるといふ。ハンモック・トーチカ式といふ巢もある。

要約すると、蜘蛛の美は、その胴體ではなく、其生活に在るといへやう。だから繪畫的よりも文學的といふ方に近いかも知れない。適切にいへば、映畫的とみることの方が、近代的可能かも知れない。現代の日本がやつてゐる文化映畫では、まだもの足りない氣もされるが、これを何んとかして發達させたらば、良いかも知れぬ。

上 高 地



信州の上高地は、名勝地として名高く、毎年夏季には遊覧客が殺到して、宿屋も客止めとなる。遊覧客に混じて、登山を目的とする登山家もまた多い。この人々が上高地を中心として、附近を探勝するのだが、爲に俗化したといふ評判が高くなつて、近年は、山の静寂を愛する人や、清浄を求める人は、上高地を好まなくなつてしまつた。

成るほど七月から八月の上高地は、賑やかだ。キャンプ村からは流行唄のレコードが流れ、モダンガール、モダンボーイ、モダンと冠詞のつくものは、一手に揃つてゐるらしい連中が、「山には慣れてゐます」といふ態を、我々田舎者に誇示してみせる。情けない哉我々は、「高山蝶の採集を禁止す」といふ高札に驚いて、眼の前に飛んでゐるオホイチモンジをとることができない。「蟲を捕るならば、徳本峠を越して、島々谷がいゝでせう」と親切に教へて呉れる。これもキャンプ村の若者だ。ところが、島々谷には、オホイチモンジは稀れで、先づ獲得できない方がたしかだ。



文部省指定、天然記念物名勝地の上高地一帯は、規則に依つて、一木、一草は勿論、一石たりとも許可なく動かしたり採集したり、切倒したりは出来ない。これは厳然と守られてゐる。登山家も、遊覧客も、定められた道路を散歩して、白樺の林を眺めたり、寫真機を出して山紫水明の仙境を撮影する。これより他には、何もする事がない。宿屋の夕食にイハナの鹽焼を楽しみにする位のもので他に何も無い。

我々は、寫生にもあきて、昆虫でも採集したいのだが、これは許されてゐない。仕方がないから、高山蝶の飛び方でも見學して記録するとか、道路の片側に積まれてある薪から、カミキリの這ひ出すのでも見物する。天然記念物が薪になる。薪から生れたカミキリ蟲がまた記念物になる。どうも不思議で仕方がない。樹木を切り倒して薪木たきぎを作つてもいいならば、薪から生れたカミキリ蟲は、最早天然記念物から除外されてゐるらしい氣もする。

オホイチモンジが薪に止まる。翅を開いたりつばめたりして、太陽の光線を反射させる。紫色や紺青や、綠色や赤い點や、純白の模様が輝くばかりにみられる。裏

の青い色が、流れの水の色と同じに綺麗な綠色だ。「ハ、ア、裏の色彩は、河原の色と模様だナ」と感心する。一疋欲しいと思ふが、法律といふものは嚴守す可きものだ。

樹木を切倒すことを許可するのに、一疋の蟲は許可しないといふ理由を考へてゐるうちに、オホイチモンジは逃げ出した。天然記念物といふのは、どこ迄が記念物で、どこからが範圍外なのか、その邊は判然としない。上高地に存在する一切の物質が記念物ならば、拂下げて薪を作ること、イハナを釣つて鹽焼にすることも、一切は禁止して、人間の立入ることも許さないで、大古の姿そのまゝを保護す可きだ。

カミキリムシは樹木の害蟲だ。これを繁殖させると、森林は次第に枯死する。折角の美林も遠からず枯木の山に化するのだが、お役所の人にはこんな害蟲も保護するのかしらん。高山蝶でもその通りで、保護が完全に徹底すれば、上高地の柳は丸坊主になる。イラクサやハタザヲや、いろ／＼の草木は、食害される。シंकヒの類は



やたらに増殖して、附近山林は荒廢するのは、應用昆蟲學の初歩でも知つてゐる知識だ。

幸ひ生物仲間には自然淘汰といふ現象が行はれる。シンクヒ蟲はキツ、キが喰ふといふ類だ。これがあるので、山はハゲ山にもならずに濟んでゐる。カミキリムシの幼蟲は、ハチがくふので平均が保てる。然し、明瞭に害蟲と知れてゐるものは、採集を許しても差支ない筈だ。

上高地は、美術家の寫生地でもある。毎年大小の畫家は、繪具箱をぶら／＼させて、上高地を散策する。上高地は道路が一本しかない。この路を通るより他は、多くは水の湧く沼地に類する。畫家は道路の上で寫生するか、河原に出るより他には腰を落着けて描く場所がない。カメラマンも同様だ。肉眼に映る山岳、河川、池沼の美しい高原的風景ではあるが、さて寫生するとなれば甘い殘雪風景より他には構圖の切り方が無い。

良く描けても、銀座の夜店に陳列されてゐる額繪に近く、悪くすれば錢湯の背景

になる。それだけ素人に受けられるから、上高地の寫生畫はよく賣れる。上高地で描くと損はないといふのが仲間の常識となつてゐる。これが德澤迄行くと、圖が狭くなるし、山岳が近くせまつて、多少恐ろしい感じになる。こゝでは素人好きの寫生はできない。德澤から奥へ行くと、いよ／＼賣る繪はできなくなる。

德本峠から眺めた穂高岳は、實に偉大な山容だ。でも此處の寫生はまだ文展にも出ない。といふのは、峠の頂點に茶店は在るが、いつも閉店してゐるので、寫生するとなると、上高地か、島々谷のイハナ留から、峠を毎日登らなくてはならない。この峠は約一里半位だが、急坂で相當骨が折れる。それに、頂上の天候は變り易く折角登つて雨にでも會へば、其日は無駄だ。峠は降らないでも、穂高岳が霧に包まれてゐては、繪にならぬ。

スケッチ位ならばとにかく、大作をやるとしたら足場が悪い。弱蟲の畫家には向かない。私は四五度こゝを通つたが、一度か二度しか穂高の雄姿を遠望したことがない。この岩魚留から峠へ出る途上には、春ならばクモマツキマテがある。夏



ならばフジミドリがある。何れも珍蝶で、昆蟲連中は毎年採集に来る。上高地は禁止だが、島々谷は許可して呉れるから、高山蝶の一揃はほぼ獲られる。それに八ヶ岳にも、南アルプスにもあるのだから、是非とも慾を満足させたいならば、いくらでも採集できる。

徳本峠へ六月の初めに來ると、上高地側に、サンカエフの花が盛りに咲いてゐる。この薄紅色の花は實に美しい。イワカミミ、オホバキスミレ等の花も咲いてゐる。徳澤へ下ると、ルリサウが一面に敷いたやうで、コバルト色の波だ。春の山梨も美しいが、夏のクルマユリ、グンナイフウロ、ムカゴトラノオ、シヤクナゲの花も見事だ。

高原といふものは、いろ／＼の花が咲いて、ウグイス、カッコウが啼いて、何處ともなく木の枝が折れる音がする。ルツクサツクを背負ひ、登山靴を重く引いて、一人でフラ／＼と散歩するには此上もなく清浄な氣がする。上高地が俗化したといふ人は、人間を見物するからで、人間さへ観ないでゐれば、俗化なんぞは感じない

で済む。バスが通はず、道路が崩れでもしたらば、何時でも元の上高地に還元できる。大自然の力は、いつでも還元し得る餘裕をもつてゐる。人はこの時に、始めて恐怖して、大自然の偉力に手を合せる。

山といふものは、美しいが、慣れすぎると恐ろしい。低い山でも高山でも、人間の考へるやうな簡單なものではない。澤山の植物が在る。澤山の動物が居る。底知れぬ鑛脈が走つてゐる。焼岳のやうに生きてゐる火山は、一朝氣が變つたらば大變だ。附近の山々は何時吹き飛ばされるかわからない。上高地の俗化なんぞは、たちまち焼石が降つて來て、原始の姿にしてくれる。

焼岳の煙りがふら／＼立ちのぼる風情は、地球の底がまだ燃えてゐる證據で、地上の生物は、いつ如何なる破目に會ふか、知れたものではない。俗化を氣にする人々は、焼岳の噴煙をよく眺めてゐれば、落着いて安息できる。



三ツ峠山



ゴマクサ

コマクサ

藏王山頂に咲くもも色の花



七月の終り頃に、三ツ峠山へ登るので、新宿驛を夜汽車で出立しました。富士吉田驛へ下車したのは、翌朝四時何分といふ夜明けで、夏の曙の空は美しく晴れてゐました。

振り返つて富士山をみますと、これは驚きました。山頂から六合目あたりまでは、六合目以下山麓地帯へかけては、コバルト色から紫色、緑色といふ調子にぼけて、一枚の繪になつてゐました。然も北齋の名作「赤富士」の繪そのまゝが現れてゐるではありませんか。

私は愕然として北齋の偉いのに頭が下りました。富士山の美くしいのよりも、藝術の傑作といふものは、大自然に敗けない神秘なものだと感歎したからです。

北齋といふ畫人の作品が、西歐の文化へ影響を與へたのは、むしろ當然だと思ひました。片々たる版畫が、フランス印象派の起原に刺戟を與へたことは、日本美術のために、名譽だとも思ひますが、それよりも、もつと大切なことは、北齋といふ人は、世界の大家にくらべて、決して劣る人ではないといふことです。ダヴィンチ



でも、ミケランゼロでも、北齋からみると、古い人です。古いといふことは、時代が前だといふものではありません。繪畫といふものに就ての考へ方が古いのです。

今、眼前に夜明け前の朝日が反映して、山頂が赤く染まつた富士山を觀て、私は今更のやうに名作「赤富士」を考へました。然しこれは、近代知識をもつて視る北齋觀であることは、容易にわかる筈です。何も北齋がこんな事を知つてゐたのではないので、北齋は偶然にも、夜明けの富士が赤く美しいので、版畫にした迄のものでせう。「物體の色彩は」などと、科學的に考へたのではありません。

赤い富士山に白い雲を配したのは、效果的ですが、これも自然の現象をそのまま、寫生した迄の話しでせう。人は考へすぎ易いものです。知識といふものは、時代によつて進歩するものだといふことを忘れないことです。古い時代の作者を考へる時は、やはり其時代の文化を参照しなければなりません。何時の時代でも、どんな偉大な人でも、其時代の文化を飛び越して、はるか進んだ時代の文明なり文化を建設し得るものではありません。

レオナルド ダビンチが戦車や飛行機を考へたのは驚歎しますが、動力に就ては發見できずに、人力を用ひる以上には出られませんでした。ガソリンで運轉することは、夢にも思はなかつたのです。茲に時代性が見とめられます。北齋もその通りで、赤富士は偶然の傑作だと思ひます。だが、偶然にしろ何んにしろ、他の人が出來なかつた仕事を遺したことに對しては、先驅者といふ名譽は確實に獲得できません。

富士吉田驛から、御阪峠を越して、甲府に行くバスの初發が六時何分かに出ます。私達は、富士山に別れて、バスに乗りました。この頃は最早赤富士ではなくなつて、色のさめた元氣のないねばけ顔の朝の富士に變つてゐました。三ツ峠登山口でバスを降りました。これから頂上までは、約七百メートルばかりの登りです。三ツ峠山は千七百メートルの山ですが、バスの停留場が標高約千メートルの地點に在ります。

晴れた朝の空氣を吸ひながら、いろ／＼の花をみながら、昆蟲を採集するのは、



何んともいへない感樂そのものです。三ツ峠に私が登るのは、度々のことで回数も忘れしました。最初は科學博物館の植物採集に参加して秋に来ました。その次はやはり博物館の連中と来て、春の植物を採集しました。サカネランとかヒメムエフランとかアツモリサウ、キバナノコマノツメ等を探して一人でよろこびました。

檜山氏の「三ツ峠山植物目録」といふものがありますから、それを見て、欲しいものを探すのです。でも容易に見當るものではありません。或時は野鳥の會の連中と来て、三ツ峠の鳥類の啼聲を聞いて廻ったこともありませう。それは六月頃でした。ホシガラスが頂上に居て、それを望遠レンズで撮影したり、イハシバリが枝に止るのを撮影する中西氏をみて感心したのもその時です。

夜は頂上の茶店に一泊して、炬燵にあたりながら、鳥の話しをきいてみました。そのうちに、佛法僧が啼くといふので、夜中に山を歩き廻りましたが、それは駄目でした。でも、ホトトギスはやかましい位に啼きますし、カッコウもよく啼きます。六月の山は、鳥の音樂會で、競演といふところです。

いろ／＼と過ぎた山の想出を考へてゐるうちに、山頂に着きます。時計をみると午前十時です。晴れ渡る御阪峠の背後から残雪の多い南アルプスの連山が、異國趣味に首を出してゐます。富士山は、現實の世界へ現れて、最早版畫ではなくなつてゐます。點々と白いものが頂上まで續いてゐるのは、富士登山者の長蛇の群列です。

富士山の麓の方に河口湖、西湖、精進湖が望まれます。左方には山中湖、籠阪峠もみられます。三ツ峠といふ山は、それ自身あれまゝ美しく山でも、面白い山でもありませんが、見晴しが良いので、周圍のお影で登山者が多く、近來流行の山となりました。見晴臺の三ツ峠、踏臺としての三ツ峠です。三ツ峠山の美しいところは、僅かに岩壁位なもので、他には特色のない山です。

昆蟲の相もその通りで、普通亞高山性の昆蟲があるが、特種の品種はあせせん。それでもフタスジハナカミキリの黒化異常型で、ハス、ジハナカミキリといふのが澤山あります。これが三ツ峠山の名産品に近いかも知れません。其他には、ヒメ



ボタルの産地でもあります。ヒメボタルは頂上高原地帯に、夜分群飛してゐます。これは見物しても美観だといへます。

螢狩といふ行事は、歌麻呂等の錦繪に遺つてゐますが、現在の東京では、螢なんぞは一疋もゐません。隅田川の螢狩なんぞといふ浪漫的の物語は、現代人の夢にも出逢ふことのない世界です。朝顔日記にある宇治の螢狩の方ならば、現在でもやれるかも知れませんが、今日の東京は螢の發生する餘地がないでせう。

私達は、頂上の茶店に一泊することにきめました。それは夜分になつて折からの月明りを幸ひ、江戸の昔しをしのび、頂上の螢狩をすることにきめたからです。

終日、山の中を歩き廻つて、寫生をしたり、蟲を採集したりして、夕方には疲れ茶店へ歸りました。時間は六時頃だと思ひます。茶店の座敷へ上つて、圍爐裏の端に煙草をのんで、今日一日の獲物くらべをしてゐますと、突然、宿の女達が「蜃氣樓が出ました」といそいで呼びに來ました。私は驚いて下駄を引づつて出てみますと、蜃氣樓は消えて跡方もありませんでした。残念ともなんとも口惜しい限りで

す。女達の語るところに依りますと、どうも横濱あたりの港の風景らしく、眞白な汽船が浮んで、洋館が並び、電燈が光つてゐたといふのです。三ツ峠頂上からは、時折蜃氣樓が觀られるので、何も珍らしい現象ではないと説明をきかされましたが私達は一生の中に一度みられるかどうかかも知れないのに、好機を逸してこんな惜しいことはありません。港の夕暮の景が、三ツ峠山頂から夢のやうに眺められたらば、どんなに面白からうと想像すると、圍爐裏の端へなんぞ行かずに、店の前の露臺に休んでゐればよかつたと思ひます。蜃氣樓。その名はよくきくのですが、一度みたかつたと思ふと、残念でたまりません。

蜃氣樓の話して、店の女達と心安くなりましたので、夜分は頂上の螢狩に女達も参加するといふ約束が成立しました。夕食を済して、風呂に入つたりして八時頃に、私達三名は、宿の女連に案内されて、折から晝のやうな月光を浴びて、高原の螢狩を試みました。月光に照らされた富士山は、影繪のやうに薄鼠色で、山麓から山頂まで、登山者の燈火が、螢火のやうに列をなして光つて見えます。赤い光の點が曲



線を畫いて光る蛇のやうに、登つてゐます。

山麓の湖水は蒼くかすんで、海底に鏡が落ちてゐるのかとも思はれるほどに、浪漫的の舞臺面です。いまにも、葦の下から魔法使の老人が現れ出して、私達を南アルプスの山頂へでも連れて行きさうな、幻想的な空氣に充ちて來ました。ヒメボタルは青い光で飛び廻りますし、夜の鳥は怪しい聲で啼きますし、月の光はすべての物體を文學化して、いま、で讀んだいろ／＼の物語が、紙切れの飛ぶやうに吹きとびます。

詩の世界といふこともいへます。でも、それは文學青年好みの言葉で、私達には向きません。何と評したらばいゝのかと考へましたが、やはり音樂的の幻想の世界とより他には適當の言葉が出て來ません。宿の若い女達は、螢を追ひ廻して、笑ひ崩れてゐますが、私は、大自然が示現して呉れた藝術の世界を、靜かに散歩してゐたくなりました。

聲も出さずに、話しもせずに、沈黙しながら散歩したいと思ひました。蜃氣樓の

裡へ這入つたやうに、海底へ潛つたやうに、蒼白い世界へ、散策することは、稀れにみる境地だと思はれます。江戸時代の螢狩は、浮世繪の世界の産物だと思つてゐたのは、果して正確な觀察だつたと初めて感じました。山頂の螢狩は、浮世繪のものではありません。これは魂の裡の世界でした。女達は現實の世界の人間ですが、私一人は現世の生活ではないやうに感じ出したのですから、周圍の物象すべてが、現實から遊離して、夢幻の世界へ流れ込んだのです。三ツ峠の月夜は、魔法使ひの老人が、一人で散策するのに好い場所です。岩壁は天に届きます。富士山は鼠色で蛇の眼が光つてゐます。海底には銘鏡が四面落ちて蒼くなつてゐます。蜃氣樓は消えても、三ツ峠は消えませんが。名勝三ツ峠山の美しくしいのは、月夜の螢狩だと私は皆さんに申し上げます。然しこれはだれがみても美しくいかどうか、その邊は責任がもてません。



吾妻山



イタドリの芽

イタドリの芽

初夏の山路に強く美しい



福島縣の名山吾妻山へ行きたいと思つたのは、可成まへのことで、新聞にスキーヤーが三名吾妻山で遭難した記事を読んで、遭難する山の魅力に感動したのがもとで、一度行つてみたいと思ひ出した。其後更に女學生の一群が夏の吾妻山で遭難して、これも大勢死んだといふ報道が、新聞記事に現れた。ます／＼吾妻山は面白いと考へてゐたが、好期に恵まれずにあたのである。だが、遂に多年の希望を達する日が来た。

福島驛に下車すると、驛前から「しのぶ高湯行」のバスが出る。これに乗ると、バスは山麓の村落を走り、次第に高く山へ登り出す。八月初めの太陽はとても暑く照りつけて、満員の車内はあんまり樂ではない。そのうちに、空は一面に灰色に變つて、霧のやうな粉末が風に吹き飛ぶ。バスはだん／＼と高く登る、窓からは霧の粉が舞ひ込んで、しめつばい風が吹く、お影で涼しくなつて、やゝ寒い氣もされる。窓外の樹からムモンアカシバミらしいゼフリスが風に吹き巻くられて飛ぶのが見える。いよ／＼「しのぶ高湯」の温泉街に來た。浴客が澤山散歩してゐる。殊に不思



議に感じたのは、子供が多いことだ。子供の大群は道路に溪流に充滿してゐる。

バスは終點に着いて下車したが、温泉宿はどこも満員らしい繁昌ぶりだ、やはり眼につくのは子供軍だ。宿の前の廣場には、ブランコ、鐵棒、運動具が備へてゐるので、子供の群は廣場に充滿してゐる。どうも妙な氣がして仕方がない。吾妻館といふ軍艦の名前のやうな旅館に行つて、一泊を頼んだ。

旅館の主人といふのは、すこし變人らしく、私の頼みはきいて呉れて、泊めてくれたが、同じバスから降りた夫婦者らしいのが、荷物を玄關に上げて、靴を脱いでから、交渉したので、主人の氣に入らず、斷然とした態度で謝絶した。「クツを脱いだりして、泊めるとも何とも言はないのに、失禮だ」と私にさゝやいた。私は驚かされた。これは危険だと感じたが、私には別に機嫌を悪くしてゐないらしい。圍爐裏にあたれとか、お茶をのめとかいつてゐた。

室が定められて、ルツクサツクを運び、一休みしてから、附近の風景でも觀たいと思つて外へ出た。私が登山靴をはいてゐると、主人が来て、重い靴だとか、何に

しに來たかとか、話しかけるので、吾妻山へ登つて寫生したいから、あした案内者を六時に來るやうに頼むといふと、山へ登るお客は困る、萬一遭難されると、村の迷惑になるから、登るならば氣をつけて、遭難しないやうにしてくれと言つた。すこし御機嫌が怪しくなりかけたので、何も山は案じることはない山岳會の選手だからと、得意のインチキを言つて安心させた。温泉の近所を一人で散歩してゐたが、何分にも霧が激しく視野が狭くて、一間先は見られない。地形がどんなだか、山が見えるのかどうか、さつぱり不明で面白くない。たゞゼフリスが風に吹かれて飛ぶので、捕蟲網をもつてやつと一疋を採集してみると、これはウスイロヲナガシミといふ普通でない蝶だつた。然し高所をとぶので採集はとても容易でなく、雨に近い霧だから今日は採集を斷念して、宿へ歸つた。

翌朝は好天氣で、六時出發、案内者にルツクをもたせて、私は網を手に、途中採集しながら登つた。温泉の裏山へ出ると、硫黄鑛山の精鍊工場が觀える。澤山の煙突からは黄色い煙や、黒い煙りがたちのぼり、四邊の樹木は立枯れて、吾妻山を背



景とした寂しい風景が先づ私の氣に入つた。これは面白いと感心したが、別に寫生もせずに登つて行つた。裏山の尾根へ出ると、廣い道路で本道になつてゐるらしい。地形圖に記載されてゐる路だ。この邊からも頂上の近くまで見渡せる。

植物は亞高山普通のもので、特に變つてもゐない。クロマメノキ、シラタマノキが澤山群落してゐた。だん／＼と登るうちに、石楠花の大株が路端に並んでゐる。花があれば見事だらうと思ひながらゆくうちに、中腹の高原に製材所の廢棄されたのが建つてゐる。この邊まで來ると、大分東北の山らしい寂しさを感じて來る。東北の山は、信州あたりの山よりも、音の無い寂しさ、音響のないとか反響の無いかいふ寂しさだ。この感じは氣味の悪いといふのに似てゐる。

頭上では、怪しいホシガラスがいやな聲で啼く、流石に吾妻山は、變つてゐると思つた。天氣は晴朗で、一點の雲もない。森林地帯ではなく高原ゆるやかなスロープの草山だが、變に音が吸ひ込まれて了ふ。樹木は五葉の松の純林で、石楠花が繁茂してゐる。此處を通過すると、また一寸急坂で、それを登るとまた更に高原だ。

この邊はゴゼンタチバナの赤い果が見事だつた。吾妻山は山全體が段々になつてゐる。この邊は頂上から三段目あたりのスロープだ。スロープから直ぐ斷崖となり、斷崖の下は更にゆるいスロープとなるといふ構造の山で、山麓から頂上まで何段かに積み重なり、山頂に噴火口が在るといふ山である。

案内者は、「こんな山ですから、地方から來たスキーの人は、スロープですべてゐるうちに、吹雪にでも逢ふと、斷崖から落ちたり、路を間違へて斷崖から落ちて遭難します」と説明して呉れた。五色温泉から山越して高湯に來る途中によく難に逢ふともいつた。三段目のスロープをすぎて、二段目の斷崖をヂグザグに登り切ると、女學生が遭難したといふ所に來る。尤もその遭難地點の中心は、頂上噴火口の周邊だが、このあたりまで廣く遭難者の死體が散亂してゐたといふのだつた。このあたりは、道路といふものが消失してゐて、たゞ岩石の破片の上を、人の踏跡らしいものを見出して登るのだから、雨でもふれば迷ふのも當然だ。

植物はハヒマツやガンコウラン等、高山性のものが多い。ミヤマハンメウが飛ん



でゐたり、キベリタテハがゐた。吾妻山にはキベリは相當に澤山ゐるが、別に骨折つて採集もしなかつた。こゝ迄來ると頂上も近いので見晴しも非常に良い。五色へ下る道には、赤い丸い指導標が點々と建てられてあつた。樹木も相當茂つてゐるらしい路だつた。

岩片の積み重なつた背の上は、登山靴には向かないので、氣をつけて登ると、噴火口のふちへ出る。水の色も綺麗だつたが、一向に神秘感が湧かず、平凡のものだつた。池を廻つて山頂一切經山へ出た。時に午前十時。さかんに雲が湧いて、たちまちのうちに、全山を包み、頂上だけを残して、見事な雲海を出現して呉れた。私は思はぬ獲物によるこんだ。直ちに寫生帖を出して雲海を寫生した。雲の上から頭を出してゐる山々は、案内人の説明によると、藏王山、烏海山、羽黒山、朝日嶽などの山形縣の山々だけで、他はみられなかつた。

殊によかつたのは、藏王山で、これはどうしても登らなくてはならぬと思はせた。一切經山で雲海を寫生してすこし早いけれども晝食を半分喰ひ、來た道を下山する

ことにした。案内者はしきりに女學生達の遭難を悲しみつゝ、私に詳細を話してくれた。何んだつてこんな所で遭難したのだらうといふ私の言葉に、彼は答へて、

「何しろ、山案内は二人も付いてゐましたし、案内人も名のある者で吾妻山では著名の者でしたが、女學生も多勢で、先頭に一人、最後に一人の案内人と、教師も澤山守つてゐたのですが、高湯を出立する朝から雨がふつてゐましたし、荒れ氣味な天候で、宿の者もとめましたでしたが振り切つて登りました。

五色との分岐點あたりへ來ると、雨が強く、三尺先も見えない有様で、落伍者が相當に出ました。この落伍者を探すので案内人は骨折つてゐるうちに、視界が狭いから、女學生達は勝手な行動をとつて、散りぢりになりました。其内に雨と寒氣のために抱合つたり重なり合つて、死ぬといふ風で、流石の名案内者も二名とも遭難して丁ひ、教師も生きてゐるものがすくなかつたのです。

急報に驚いて、私達も救助に來ましたが、其時は大半遭難して残つてゐる者はあんまりありませんでした。雨が晴れて死體を探し出して運びましたが、可哀想で



した。」

と今更のように當時を追想して墓標に手を合せてゐた。雲海は静かに運行を始め手を合せた案内人の姿が、大變に美しく映つた。

私達は、何となく心淋しくなつて、下山を急ぐ氣になつた。途中製材場のある地點まで來ると、やゝ氣も落着いて來たので休息して残りの飯を平らげたり、クロマメノキの果實を摘んで試食したりして遊んでゐた。クロマメノキの味はブドウ酒に似て美味だつたが、案内者はあんまり喰つてはいけなさと注意した。またぶらぶらと下つて、例の硫黄鑛山の所まで來ると、煙突から黄色い煙や、黒い煙がたちのぼつて、如何にも良い風景なので、一枚寫生したくなつたが、これは斷念して温泉に歸つた。吾妻山の寫生は、雲海で満足して他はどうでもいゝのだから宿へ着くと直ぐ、バスの時間をきいて、歸途に着いた。實は文展出品の「山小屋」の繪に、小屋の窓から見える曙の雲海を寫生したいのが目的で、高湯に來たのだつたが、其目的も運好く貫徹し得たのだから、最早用はないので、さてこそ直ぐ歸京することにしたのだ。

早く歸つて、版畫製作にかゝらぬと、文展に間に合はないと困るので、氣がせいであつた。それにしても、午前十時に雲海が現れたとは、何と不思議な仕合せもあるものだと感じた。

東北の名山、吾妻山は、雲海の名所かも知れないが、遭難の名所とならぬやうに、登山者は氣をつけなくてはならぬ。旅館吾妻館の主人が、氣にするのも無理ではない。



大  
河  
原  
峠



カラハナサウ

秋の高原にみるカラハナサウ



高原風景といふものにも、一種の型はあるやうです。霧ヶ峰とか大河原峠等の風景も、要するに信濃高原風景共通の型に属する風景ものと思へば、あんまり甚だしい間違ひもありません。

峠の中腹から八ヶ岳連山、南アルプス連峰、木曾駒ヶ岳、御嶽山等が遠望されます。この種の遠望風景も、ハイキングの折には、まことに美しく感じるものです。繪にはならない場合が多いやうです。大河原峠道も、繪畫としては、一寸適切な場所とはいへません。尤も前景に人物でも配せば格別ですが、遠望風景だけならば、あんまり廣すぎて困ります。雨とか雪とか霧とか、雲の面白い姿でも出れば、或は繪になるかも知れませんが、一片の雲も無い晴天の日では、考へなければなりません。

大河原峠へ登つて、何が一番私の心を打つたかと申しますと、それは材木を運搬するトロツコと、ガソリン機關車、それに従事する工人の群、山間溪谷に架設されたレールの曲線、其他人間の仕事を配した峠の自然美、かふいつたやうな畫題に、



私の心は動かされません。

小齋温泉にしてもさうです。ヲタカラカウやエンピセンノウの咲き亂れた自然の花園を前景にして、其附近にある橋とか、旅館を配して始めて、繪畫的になると考へますが、もし旅館は俗だからといふので、これを除外しますと、花だけになつてまことにもの足りないものとなると思ひます。要するに、高原風景といふものは、自然美と、人間生活との交錯した美が、最も大切な要素となるものかと、私は一人で考へてゐます。

今夏、福島縣の吾妻山へ登りました折に、中腹の高原地帯で三四年前まで製材をやつてゐた工場の跡を見ました。今は廢止されて荒れ果てゝゐますが、其建物は残つてゐます。私はこの風景を大變に美しくいと思つてみました。吾妻富士の赫い肌を背景にして、五葉の松の純林を左右に眺め得るこの廢工場風景は、ほんとに美しいものでした。私の爲には一切經山の眺望も、五色沼の神秘も、この高原の工場風景には及びませんでした。

更に私をよろこばせたのは、高湯附近に在る硫黄鑛山の風景でした。黒や黄色や白い煙りのたちのぼる澤山の煙突、廢鑛の山、それ等を道具建にして、無心に遊ぶ鑛夫達の子供の群、吾妻山を背景としましたこの一種靜寂な風景には、立派な繪畫美を感じました。或は文學的な要素も混つてゐたかも知れませんが、今に忘れない吾妻山第一の盛觀であつたと思つてゐます。

大河原峠へ來ました時も、やはりこれに類した美を、私は選びたい氣になりました。針葉樹林でみました苔の美しくさも、マヒヅルサウ、ゴゼンタチバナ、スギカヅラの姿も、峠の高山植物群落も、細かくみれば美は限りもなく散亂してゐますが、一枚の繪畫としてみる場合になりますと、やはり人間生活といふものと、深く交錯した自然美に、私の心は強く働きかけるやうです。

斯ういつたからとて、必ずしも大河原峠の悪口ではありません。この高原に遊ぶことは、路は樂ですし、植物は豊富らしいし、昆蟲も季節が良ければ相當に面白いかと考へますから、休日を利用してのハイキングには適當な地だと思ひます。たゞ



寫生に来るのは、其人の好みにもよりますが、だれにでも向くとは申せません。  
繪になるかならないかといふ問題は、これは獨斷できめ得られない事ですから、  
各人の好みにまかせたいと思ひます。

萬葉集 卷十四

戀しければ袖も振らむを武藏野のうけらが花の色に出なゆめ

萬葉集 卷十四

我背子を何どもいはむ武藏野のうけらが花の時無きものを

箕  
面  
山



大阪近郊の名勝に、箕面山といふあんまり高くない山がある。「山高きが故に」の諺の如く、この山は樹木が繁茂して、ひるも暗いほど貴ひ山である。

私がこの箕面山へ昆虫採集に行つたのは、明治二十八年七月のことで、當時は現今のやうに電車の便もなかつた。梅田から汽車で神崎へ行き、神崎から輕便鐵道で池田へ行つた。池田から箕面山までは歩いてゆくのだ。低い山を越して、今の停留所のある地點に出て、それからいよゝゝ、山道にかゝる。この道路は現今とすこしも變つてはゐない。たゞお土産屋や食堂が一軒もなく、ほんとの山道だつた。辨天の神社は今の通りで、鳥居の近くに宿屋もあつた。私達はこゝ迄來たらば、日が暮れて、この宿屋へ一泊した。マツダケの汁を出してくれたのが珍らしく今でも忘れない。

次の日は、早朝宿を出て、昆虫を採集しながら、瀧を見物したり、兄達は寫生をやつた。瀧の附近にはウラギンシバミ、テングテフが群をなしてゐた。瀧の上のトンネルも今と同じだが、瀧の上の流れは、暗い位に樹木が茂り合つて、大變に良か



つた。政の茶屋は勿論無く、瀧から勝王寺迄は、人家は一軒も無かつた。勝王寺のすこし手前に、クヌギの植林があつて、それは今日も多少残つてゐるが、そのクヌギに、オホムラサキが澤山集まりクワガタの類も豊富に居た。オナガアゲハ等も飛び廻り、相當な採集地だと思つた。其晩は勝王寺山門の近くの宿屋へ一泊した。この宿屋は、ほんとの山奥の宿で、食物なんぞも粗末な乾物類だつた。翌朝こゝを立つて、茨木の驛まで出るといふので、道を可成速く歩いた。この道は中途から田畑ばかりで、昆蟲採集にはあんまり良いとは思はなかつた。

尤も採集法も幼稚で、肉眼に映る蟲しか採集しなかつたので、探し求めるといふことをしなかつた。空中を飛んでゐる蝶とか、葉の上に居る甲蟲とかより他には、獲物としなかつた。タ、キ網などもやつたが、これも申譯的で、それほど熱心にしなかつた。併しこの採集は、今から思へば箕面山で昆蟲採集を試みた最初だらうと思つてゐる。當時、大阪には、昆蟲採集なんぞする人は、他に無かつたのかも知れない氣がする。

箕面山を開いた先覺者は、私達だと自惚てゐるが、これはどうだか保證の限りではない。箕面山へは、其後私一人で、毎年採集に行つたが、明治三十四年頃に、東京へ移住するやうになつてから、美術の方の研究で、箕面山のことは、いつの間にか忘れてゐた。ところが、一昨々年、久しぶりに、箕面山へ昆蟲採集に行つてみて、驚かされた。それは山麓の繁華になつたことでも、電車の便利なことでも、公園になつて採集を禁止された事でもなかつた。

以前から、瀧までは蟲がすくなく、瀧から上が好採集地だつたから、今とあんまり變らないが、採集家の多いのに驚かされた。行列、行列、採集家の行列だ。白いネットが續いて、旗行列のやうだ。これでは蟲もゐられない筈だ。手頃な石は絶えずコロガスので落着いてゐられない。歩行蟲も、石の下へ這入つてゐる時間がない。倒木は絶えずころがされどうして、朽木になれない。先の人左にころがす、次の人が右にころがす、後の人がまた左にといふ風に、丸木は静かに倒れてゐるひまがない。タ、キ網は木の葉をいつもたつき、これも坊主になりさうだ。



この有様を東京から行つて眺めては、流石に採集する氣もしない。一步も踏込む勇氣が出て來ない。だが、季節がギフテフの頃だつたから、箕面山のギフテフを一疋欲しいと思つて、旗行列の一員となつてみた。東京流の採集法は、こんなに人が多いと、何の役にも立たない。終日行列に参加して連れ立つたといふだけで、何んの獲物も無かつた。それから、次の日はキミ峠へ行つた。六甲山へも行つた。

六甲も旗に近い方だつたが、こゝは箕面山ほどでもなかつた。紀見峠は閑散でたれにも會はずにすんだが、こゝも山の姿をみれば採集者に相當荒されてゐる容子が、明かにみとめられる。紀見ではオサムシをすこし得たが、關西流の採集法からみると、子供の遊びでいどで、お話しにはなるまい。

關西流は徹底的採集法で、山を荒すこと一通りではないので、中に採集者立入禁止の山林もあるといふ話をきく、それ位に徹底してゐる。東京附近の山なんぞは、ほとんど處女地に等しいので、東京の人の採集法が、如何にぬけ目が多いかといふことにもなる。

一面また植物の方からみると、關西の山は處女地に等しい位に、植物は豊富だ。東京近くの山林には稀れにしか得られない植物でも、關西の山には踏み倒す位に群落してゐる。これを見ても、關西には植物採集の趣味が、昆蟲ほど普及してゐないやうにも思ふ。關東は植物、關西は昆蟲、斯く區別出来るならば、自ら地方の人心に關係があるといふことが、想像できて來る。

元來、昆蟲標本には、一定の市價といふものが在る。公定はないし停止價格もないが、自然と一疋いくらといふ相場ができてゐる。蝶類の如きは、その最も確然たるもので、高いのは一疋千金を呼び、安いのも二三十錢の市價は定まつてゐる。假りにも標本として完全品に對する價格は、關西、關東の區別なく、ほとんど協定價格に似たものが定められてゐる。

ところが、植物標本になると、まったく賣買はできない。よほど有名な學者の蒐集品で、由緒ある標本なら格別だが、素人の蒐集したものは、一文にもならない。これを扱ふ商人もゐない。昆蟲とは全く反對な現象を呈してゐる。



昆蟲の交換といふことが、同好者間や、素人採集家と、商人との間に常に行はれてゐる。この標本交換は、非常に良い事で、多く採集した蟲を、まだ所有しない人に渡して、自分に無い蟲をもらへば、お互に標本が充實するし、研究もできるが、良法は即ち良法として存在するだけで、蟲に價格がある爲に、安い蟲と高い蟲との交換には應じなかつたり、損得の觀念が先に立つて、交換といふことは、容易に順調に運ぶものではない。だれも損をすることを好まない。

蟲はもと、山野に生息してゐるのだから、安いも高いも無く、一疋は一疋なのである。普通種でも、稀種と呼ばれる種類でも、等しく一疋の生命に變りはない。この一疋と一疋を交換すれば、これが一番良策なのである。我々は趣味に採集してゐるのだから、蟲の價格なんぞは、商人にまかせて、我れ關せずでゐる可き筈だ。金錢の欲を出す位ならば、昆蟲なんぞ採集しないで、商賣に努力した方が、どれだけ効果的かわからない。

素人の昆蟲採集とか、登山等の趣味は、高尚な趣味である可き筈で、賤しい金錢

の欲望などは、忘れてゐる時間として、人生の上に頗る價值の高い、何物にも代えられない意味がある。この貴重な瞬間にも、この蟲は何圓するとか、この蝶は何ほどのものだとか、金錢に換算してゐては、折角の登山も全く意味を失ふ。これこそ絶大な損失である。自然科学は立派な學問であるから、學問と觀察を兼た一日の行樂に、平生の欲深を棄て、大自然に同化してこそ價值もあるし、意味もまた在る。よろしく、我々素人は、金錢に換算する事を廢止して、昆蟲や植物の採集をやり、また研究をやりたいものである。

茲に到つて始めて、眞の趣味となり、眞の研究ともなる。大自然は斯くて我々に様々な美を示し、眞の姿を現して呉れる。



奥多摩の山々

山岸生徳編



カタクリの花

一五二

春の武蔵野に咲くカタクリの花



奥多摩の山では、雲取山の二千メートルを最高として、次は七ツ石、鷹の巢、天目山、天祖山の千七百メートル級、三頭山、御前山の千四百メートル、他は千メートル内外の低山ばかりで、道路も整備されてゐるし、指導標も先づ出来てゐる。登山も安全で、然も相當に深林にも富み、溪流も瀧も揃つてゐる。

殊にバスの便利もいゝし、ケーブルもある。近來登山者の多いことも當然なことで、今更驚くこともない。だが山は廣い、いくら澤山登つても、皆んな吸ひ込まれて、どこへ散らばつたのかわからない。人間なんてものは低山よりも低いものだ。

こんな都合の良い山脈が、東京の附近に存在して、僅かな時間と安い費用で來られるのだから、日歸りの登山、遊山客には恵まれたところだといへる。精出して山へ登り、紫外光線に浴す心掛けも良い。

野鳥の類も多いし、植物も多い。昆蟲はことに寒地性のものがゐて、研究にもなる。地質、鑛物、それ／＼に、何か面白いところがあるかも知れない。まだ何んにも研究されてゐない處女地だから、これからである。我々も一役買つて、何か調査



したいと思つて、毎年春から夏には度々登山を試みてゐる。然し輕卒にやるのはいけないから、出来る限りは充分に資料の蒐集をやらねばなるまい。

これが低山趣味の最も低山趣味らしいものだと考へる。登るに易く下るに速いから良いのではない。時間に餘裕のあるところが良いので、高山だとそんな時間の保有量が乏しい。従つて何も觀察できずに通過して了つて、何度くり返しても、收穫がない。

日本アルプスとか、朝鮮の白頭山とかいふ山が、日歸りで登れたらば、様々な新しい発見もあるかも知れない。登山道だけあるくのでは駄目なもので、道の無いところが肝心なのだから、低い山ほどやり易いのだ。この目的には、奥多摩の山々は適當な山だ。高いといつても二千メートル、山小屋も有るから滞在してゐれば何んでも自由に行動できる。だが、溪谷だと、雲取谷のやうな場所は、まだ行通の不便を感じさせる。

白岩山の溪谷なんぞも不便だ。溪流は足場の關係で、どうも勝手に飛び廻るとい

ふことができない。然し溪流が一番植物や昆蟲の寶庫なのだから、どうしても溪流を占領しないことには、山の真相が判明しない。山岳の尾根は、採集地としては不十分らしい。水分がすくなく乾燥してゐるからだと思ふ。生物は水が無くては生活ができないのだ。

千メートル足らずの低山だと、尾根から溪に下るのも近いし、溪から尾根へ出るにも早い。時間の餘裕と距離の近いことが、とても氣樂に感じて、充分に探し出せる。だが、低いといつても、山は廣大だ。七八年奥多摩の山ばかり歩いてゐるが、まだ知らない尾根、行かない溪谷は澤山ある。まして道の無い所まで一應調べたいと思へば、一生の仕事だ。例へば、御前山へは度々登るが、三頭山との山續きはまだ知らぬ。三頭山は行ったが、山梨縣の側はまだ見てゐない。雲取山から小河内へ下る道とか、七ツ石山から日原へ下る道、奥多摩黒部の稱のある溪流もまだみてゐない。

天目山、天祖山も登つたことが無い。こうして數へ舉げると、未知の方が多いと



いふことになる。天候とか、時間とか、季節とか、身體の調子とか、いろいろの關係から、完全に目的を果すことは相當な努力を要する。こゝ、數年間に百回近くも奥多摩へ行つて、其間發表し得たことは僅かに、「奥多摩蝶類目録」といふ片々たる記録だけだ。まだ奥多摩羊齒目録、奥多摩天牛類目録、奥多摩步行蟲目録等が残つてゐる。これは目下材料蒐集中で、何時になつたらば完結發表ができるものか、當分は望みがない。

でも登山の趣味としては、目的をもつてゐるといふ事が強味だと信じるから、來年もまた繼續して、シダを探し、カミキリ、ゴミムシを追ひながら、奥多摩の山々を歩きたいと思つてゐる。寫生といふ事もあるが、繪の方からみるに、雲取山は別として、他はどうも繪にはならぬ。村落を描くならば、日原とか小河内とか大平とか、多少繪になる村落もあるが、これとても是非とも寫生したいといふほどのものではない。

それに近來は、奥多摩で寫生するよりも、昆蟲を採集した方が、はるかに得ると

ころが多いので、繪の道具は一切もつて行かぬことにした。描くばかりが繪でもなく、なまじ拙い繪なんぞやらすに、山を眺めて暮す一日を楽しんでゐる。急がずに靜かに山を眺めたり、寝ころんで空をみて暮す半日もある。蟲もとらず、花も折らず、繪もやらす、尾根で一日遠望して過ぎることもある。溪流に腰をすゑて、水の流れを観てゐる時もあるといふ風に、何をしなければならぬと欲を出さずに、天地自然の有様を眺めることは、人生にとつて最も必要な時のやうに感じる。

無心になつて空と山を見渡すこのとでできるのは、低山に限る。低山は我々の爲に知識の藏であるばかりでなく、精神的の糧食倉庫でもある。大都會の近くに、奥多摩の在ることは、最もよろこぶべきものだと思つてゐる。近來遊山客が殺到して、大切な靈域も、荒らされたり俗化したりはするが、こんな事位は、心配せずともよく、何萬人が登つても、皆それ／＼別な道を登るので、決して同じではないのだ。それに魂の登山者には、俗化なものもない。

寫生、植物採集、昆蟲採集、といふ順序を経て、最近はなんにも欲しくないとい



ふ登山になつて来た。大自然の裡に座してゐれば、それで充分だと思ふやうになつた。人があやうとゐまいと、俗化しやうとしまいと、氣にならずに居られる。

奥多摩の山々は、案内を知つた山々だ。一人で散歩しても、山頂で寝ころんでゐても、溪谷で水を観ても、夕方になれば直ぐ歸途に就ける。遭難の心配もいらぬ。疲れもしないし足も痛まない。三里五里はあるく事もあるし、二三丁しか歩かないこともある。昆虫採集に夢中になつて、同じ路を何度も登つたり下つたりすることもある。そんな時でも蟲はどうでもいゝので、逃げられても残念でもない。御嶽の大塚山から、萬世橋の近くまで一日に三回往復したり、大丹波の棒ノ折山登山口から獅々口小屋近くまで二往復したこともある。雨にふられたことは度々で、道に迷つたことも何回もある。御前山では四回のうち二回は、頂上を目前に望んで、どうしても道がわからず引返した。けれども、そのお蔭で、花の美しいのを観たので結構満足して歸つた。海澤から大岳へ出るコースも三回行つた。行く度に道が悪くなつて、今年春あたりは、橋も一本もなし、道も無いところができてゐた。

魂の登山者には、そんなことは苦にならない。登れなければ何時でも引き返して歸るだけの話だ。奥多摩の山々を深く知るといふことが目的だ。蟲も羊齒も採集せずに判明すれば、其方が良いので、品物が欲しいのではない。繪も描かずに済めばそれでも自分だけはすむ。

雨がふる日は、晴天の日と變つた風景がみられる。曇日もまた面白い。道が無い位は何んでもない。たゞ山に來れば良い氣もちになる。蟲でも植物でも新らしい種類が手に入ると、一疋でもうれしい。この感情がいゝきもちだ。知識のカケラがまたふえれば、うれしくなる。自然の斷片、この斷片が慰めてくれる。

何を求め、何を欲するのでもない。何んにも具體的にはほしく思つてゐない。蟲も植物も、たゞ相手を知りたいといふことだ。山へ登つて山を知らず、日本に生れて日本を知らず、人間であつて人間を知らず、生きてゐるのに生命を知らずに居ては、生き甲斐のないやうに思ふから、これが知りたいといふので、骨折つてゐる。まことに夢のやうなことで、恐れ入るが、相手を知ることによつて、自分が判然す



るといふ目的がある。

蝶類目録を作つた事も、これからも作りたと思ふのも、繪も描かず、山も歩かず、天を眺め水を觀て暮すのも、すべては人間を知ることの手段となる。そのためには、山を汚す人も、ラツバを吹く青年達も、すこしも苦痛でない。日本文化史を語る様々な遺跡も、天然記念物も、遭難の話しも、すべて一切の現象はみんな資料として心の裡に收藏したい。おや／＼無欲は大欲に一致するらしくなつた。これは困つた。

版畫と裝飾美術



この版畫と裝飾美術といふ問題は、現代と過去の版畫の内の或ものは、純正美術では無く、裝飾美術或は工藝版畫であるといふ事なので、版畫全體が裝飾美術だといふのではない。

つまり版畫を三ツに分類して、文展でいへば、二部と四部とに區別す可きだといふ説に他ならない。この際、二部が良くて、四部が劣るのかと誤解しはいけない。純正美術と裝飾美術の分類は、いまこゝで云々しなくとも、讀んでゐる中には判然とした説が在る筈だから、それまでは何ともいはない。

「君の版畫は裝飾美術だよ」といふと、何も考へないで怒る人もあると思ふ。こんな人は、つまり自分が足りないので、怒る理由が判然としてゐないのだ。たゞ、どの邊から裝飾美術で、どこから純正美術とするかといふことになる、各人いろいろの説があると思ふ。この所説に遠慮してゐては何んにも言はれない。それでこ



、に独自の説を述べてみることに、する。だけど、裝飾美術と純正美術は、兄弟の關係で、何れとも判然し兼る作品も澤山ある。

順序として、純正美術、裝飾美術、工藝版畫の定義を定めなければならぬが、それは今更云々する迄もないことで、略しても差支あるまいと思ふが、念の爲に後に述べる。それよりも早く、進行した方が便宜かと思ふ。

現代の版畫に例證を求めてもいゝが、神經質の作家も多いから、これを徳川時代の作品に就ていふことにする。例へば、墨版だけの木版畫、この内でもいろ／＼あるが、彼の神社のお札の類に、簡單に動物の圖などが摺つてあるのがある。

古いものには佛像なんぞを並べたものなどもある。例を挙げると、三峰神社のお札に狼の圖があつたり、それからこのか知らぬが鬼の踊つてゐる圖もある。あんなものは、工藝版畫といふもので、裝飾美術ではない。我國の初期作品中には工藝版畫が随分多いので、純正美術や裝飾美術に入れるほどのものは至つて稀れである。

それもその筈で、木版畫と染色とはもと同じ用途から出てゐるらしく、布地に摺

つて染めるか、紙に摺つたかの相違らしく思はれる點もある。布地のものは摺るとはいはないかも知れないが、元版を木版に作るのが多い。それでなければ型紙だ。

型紙版も木版と似た効果が現れるから、これも版畫の一種として、いまでも「合羽版」といふ名稱ができてゐる。

其れ等のものは、工藝版畫に多い技法で、裝飾美術にもまた應用されてゐる。純正美術としての版畫には、こんな技法はまだ用ひられてゐない。その必要もないかと思つてゐる。

## 二

徳川時代の版畫で、どれが純正美術か、といへば、木版では僅かな作品を挙げるにすぎない。他は概して裝飾美術の部か、もしくは工藝版畫に屬す可きものだ。銅版には流石に多くの作例を挙げられる。司馬江漢や亞歐堂田善のものには、純正美術とみていゝ作品が多い。同じ銅版畫でも、江戸末期の作家のものは、工藝版畫に



接近して来るものが普通で、稀れに良いものもある。

木版では北齋の洋風畫の内に、これに近い作例があるのと、國芳、春亭のものにも、それにまあ近いものがある。豊春にも無いこともないが、極まれなものなると、摸刻だからこれは除外した方がよい。清長にも、歌麿にも、近いものはあるが、然しこれは研究の餘地を残して置く可きものだ。だが純粹なものは全くない。

その他の作は概して、裝飾美術になつてゐる。裝飾美術でないものは工藝版畫か玩具に近い。尙、それよりも下らぬものも澤山ある。版畫ではないが、陶器磁器の類には、版畫の技法に關係の深いものが多い。彼のオランダ皿のやうな銅版畫焼付のものは、あれは工藝版畫と呼んで差支ないが、それほど、版畫其物でなく、木版のタクニツクと、陶磁器の模様タクニツクが共通してゐる場合が珍らしくない。これも一種の版畫と呼ぶことができる。

「黒と白」の木版畫といふものゝ内には、陶磁器の繪模様と似たもの、或は共通の工藝化が認め得らるゝ、もつと良くみて、裝飾美術化といふのかも知れない。こ

の邊は論者の好みによる。同じ「黒と白」でも、銅版と石版の黒と白は、色彩の代表としての「黒と白」だから、素描の場合と同様だが、近頃木版で「黒と白」といへば、圖案を指すものらしい。圖案も裝飾美術かも知れないが、工藝に位置させる可きものだと思ふ。裝飾美術らしい版畫はまだ現れ出ないが、木版は本當に裝飾美術になれば、一番良い立場だと思はれる。

何故ならば、木版は寫實を目的とする技巧も、材料も持つてゐない。どうしても抽象的に表現するか、暗示的になるより他には道がない。石版や銅版は、これに反して如何なる寫實でもやり得る技法と、材料を備へてゐる。木版では歌麿の「潮干のつと」の介類が、木版としての寫實の極致かもしれぬ。あれ以上はだれにも出来まい。尤も洋風の木口木版は、これは木版でも相當やれるが、板目木版では、無理が多くなつて無駄である。日本畫家が洋畫の眞似をするのと同じに、骨折り損の方だ。

裝飾美術としての木版、これが木版としては本道だと思つてゐる。



歌麿の美人畫、春信の美人畫、寫樂の役者繪、豊春の浮繪、これ等はすくなくも裝飾美術の定義に合格する版畫といへる。

此邊で裝飾美術の定義其他を書いて置く、

- 一、主觀的——浪漫的——暗示的——(裝飾美術)
- 一、客觀的——科學的——寫實的——(純正美術)
- 一、技巧的——模樣的——下手物的——(工藝版畫)

これは獨創的の分類だから、他の人は何といふかそれは知らない。或は一般に行はれてゐる分類法に合致してゐたらば、それでもよろしい。相違してゐたらば、それも面白い。分類といつても、藝術のことだから、昆蟲や植物の分類のやうに、判然と區別はつかない。中間型も澤山出て來るし、作者は同じでも、作品はいろいろになつて現れることも珍らしくはない。

裝飾美術らしいのに、寫實が編入されたり、科學的になつたりする事もあり得るのだから、歌麿は浪漫派で、清長は自然派と區別してはいけない。誤りができるも

とだ。

### 三

裝飾美術といふものは、日本の美術全體からみて、最も肝要な美術であるから、此後この方面を育ててはいけない。純正美術は、純正美術でこれも大切には大切だが、この方は世の中の進むに連れて、自然に發達するといふ立場に在る。

工藝もやはり指導を必要とする。放任して置くと、西洋の安物の更紗模様のやうな邪道に隋ち込む、これは注意す可きである。一方また味にのみ重きを置くと、模様とも、幼稚とも評しやうのない版畫ができる。これは一番始末が悪い。神社のお札か、子供の玩具ならばとにかく、版畫だと自慢してゐられては、まことに迷惑だ。

版畫は、日本の名物になつてゐた。日本を代表する美術は、版畫であつた。然しこれは、木版と限るのではない。裝飾美術であつたことが有名になつたもどと思



ふ。光琳でも宗達でも、永徳でも山樂でも、裝飾美術の大家として日本を代表した。歌麿も寫樂も、北齋も、一應は裝飾美術家として、代表したのだと信じられる。

ボツチエリでもアンジェリコでも裝飾美術家である。近くはシャパンヌでもピカソでも裝飾美術家と思ふ。然しこれ等近代の人にくらべては、日本の美術家の方がはるかに、優秀性をもつてゐる。たゞ現代の作家は、これはくらべものにはどうかと思ふが、でも日本人であるから、彼等にまけるやうな心配はない。たゞし裝飾美術は、日本の傳統的優秀性を考へての事であるから、自惚ないでもつと努力す可きである。

日本美術史をみれば直ちに、この意見に賛成するにちがひない。下手物の味なんぞに迷つてゐる時ではない。摸造された下手趣味が如何に愚劣であるかを、振り返つて反省す可き秋だ。昔の下手趣味の雅味は理解できる。これは双手を擧げられる。けれども、作爲の跡が判然と目立つ下手は、作りものなので、これは邪道だ。

こんな下らぬものに祇徊してゐないで、進取的にならなければいけない。どうも木版といふものが、素人の間には、とかく味とか何んとか、老成したやうな、幼稚なやうな、道樂的遊び道具に使はれ勝ちだ。そんな時には、石版や銅版だと、これは素人には手が出せない。熟練工になるには年季奉公しなくてはならぬ。

まだ言ふ事は澤山あるが、また書く約束もあるからこれ位にして筆を置くこととする。



版畫の現代性



アザミ



### 一、版畫は民衆美術

版畫といふもの、性質は、民衆の爲の美術といふところに、版畫の社會性が確證されてゐる。このことは洋の東西を限らず、時代の古今を問はず、版畫の世界的性格とみて差支ない。日本の浮世繪や、フランスのエピナール版畫、古い銅版名所繪でも、石版刷の名勝繪でも、すべて版畫は古今東西、民衆の爲の美術といふところに本領は在る。

油繪や日本畫等の肉筆ものは、一部特殊階級のもちものか、教會寺院、或は美術館などに陳列されて、限られた人達が觀照するに備へるとか、金持の玩具に等しい扱ひを受けるより他には、道のないものだが、我が版畫は、それに反して、一般市民の日常生活をうるほす役目を果して、我等の生活になくはならぬものとなる。過去に於ても、江戸市民の生活には、浮世繪が一日も缺くことの出來ない位に、生活必需品の如くみなされてゐた。江戸市民はこれによつて知識を求め、日常生活



を豊富にし、社會生活を圓滿にした。

現代に於ても其の通りで、我々の生活上には、一日も缺かせられないものは、美術に於ては版畫をもつて、最大最上のものだと斷言できる。然しその版畫は、昔の如く單一のものに統一されてはゐない。現代の版畫は、版の形式から、需用上の範圍まですばらしく弘大無邊の領域をもつてゐる。

現代の版畫を大別すると、工業版畫、工藝版畫、手工版畫、藝術版畫(創作版畫)に分類できる。徳川時代の版畫は主として工藝版畫に限られてゐたので、單一であつた。單一の版式でもつて、すべてを辨じてゐたのだから、それだけ社會が簡單だつたのだともいへる。現在はそれとはまるで異ふ。版の形式からみても様々で、木版より無かつた江戸生活とはくらべものにならない。現代で最も活躍してゐる版畫は何かといへば、工業版畫である。例へば、毎日配達される新聞、あれがすでに版畫だ。活字は畫ではないが、挿繪の寫真版は、立派な工業版畫である。その他、雜誌の表紙、口繪、挿繪、單行本の表紙、箱張、映畫のポスター、宣傳用ポスター、

商品のレツタル類、其他様々の日常生活に必要な物品には、必ず何か印刷した畫圖が付いてゐる。これ等は工業版畫といふ部門に屬するもので、我々の生活とは切つても切り離すことのできない必需的關係に在る。

この工業版畫の裡にも、工藝版畫、藝術版畫に迄も向上させ得るものが澤山混交してゐる。諸外國では、この點、まことに良く發達して、酒のレツタル一枚みても色彩の調子、圖案の優秀、印刷の精巧、すべて完備してゐる。ポスター一枚にしても、外國のものには、藝術版畫として立派に通用するものを多く見受ける。悲しいかな、日本のポスターは、宣傳といふ使命が終れば、紙クヅである。この相違は、民衆がもつと版畫に關心をもつて、鑑賞眼を備へれば、直ちに向上させる事が、必ずしも不可能でない。日本の文化が外國に及ばないといふのではなく、むしろ日本の方が外國よりも進んでゐると思へるところもある位で、要するに、民衆が鑑賞眼を高めれば、それに答へる用意はできてゐる。

我國でも、江戸時代のレツタルや、廣告、宣傳用印刷物等は、今日我々がみても



立派な工藝版畫であつた。然し優劣は別として、とにかく印刷物である以上は、すべて圖畫は「版畫」といふ範圍に入れて、すこしも間違ひではない。だから版畫を廣義に解せば、何處の民衆、或は國民でも、版畫を必要としない國民は一人も居ない。

版畫といふ弘大な領域の裡には、藝術版畫から工業版畫に至る迄の、様々な用途と目的を備へてゐる。現代ほど版畫の必要な時代は、過去にはなかつたともいへる。それは文化の進むに連れて、ますます、版畫の世界は旺んになる可き筈なのである。ところが、實は今ほど一般から版畫といふ名稱の忘れられてゐる時代も稀れで、この罪は様々なところに有るが、我々版畫家の側にも半分はある。何故ならば版畫といふものを無暗と、藝術だ藝術だと、持ちあげてしまつたので、民衆の方からは、肉筆畫と同じやうに、高根の花と祭りあげられたかたちで、親しまなくなつた。これではいけない。此際版畫家は態度を改めて、民衆の前に作品を展げ、罪を謝して見直してもらふ可きであらう。民衆はまた自己の座右に散亂する雜誌、街頭

に風に吹かれて破れ飛ぶ映畫のポスターも、一枚の版畫であるといふことを知つてもらひたい。さうして版畫にも澤山の種類があるといふことを考へ、版畫の存在を改めて確認して欲しい。

## 二、版畫の種類と藝術版畫

現代の版畫には前述のやうに澤山の部門があり、また澤山の種類が有る。江戸時代の版畫は木版に限られて、稀れに銅版があつた位のもので、明治の初年まで來た。明治になつて石版術が渡來して、我國の版式は木、銅、石の三種になつた。然しこの三種の版は、すべて人の手に依つて製作されてゐた所の、工藝版畫に屬するものであつた。

明治も中頃に及んで、寫真術を版畫に應用して、製版する術が外國から傳へられた。甚だ便利になつたと同時に、工藝版畫は化學應用の工業版畫にその立場を譲つた。寫真アミメ銅版、寫真亞鉛凸版、原色版、コロタイプ版、寫真石版等。印刷術